

大菩薩峠

市中騒動の巻

中里介山



しらね
白根入りをした宇津木兵馬は例の奈良田の湯本まで来て、そ

こへ泊つてその翌日、奈良王の宮の址あとと言われる辻で物凄い物
を見ました。兵馬が歩みを留めたところに、人間の生首なまくびが二つ、

竹の台に載せられてあつたから驚かないわけにはゆきません。

すてふだ

捨札すてふだも無く、竹を組んだ三脚の上へ無雑作むぞうさに置捨てられてある
が、百姓や樵夫きしりの首ではなくて、ともかくも武士の首でありま
した。

「これは何者の首で、いかなる罪があつて斯様かようなことになつた
ものでござるな」

通りかかった人に尋ねると、

「これは悪い奴でございます、甲府の御勤番衆ごきんばんしゅうの名を騙かたつて、この望月様という旧家へ強請ゆすりに來たのでございます。望月様は古金銀がたくさんあると聞き込んで、それを嚇おどして捲き上げようとして來ましたが、悪いことはできないもので、ちようどこの温泉に泊つていたお武士さむらいに見現まわされて、こんな目に会つてしまいました。あんまり凶々ずうずうしいから首はこうして晒さらして置けとそのお武士がおつしやる、望月様もあんまり酷ひどい目に会わせられましたから、口惜しがつて、その武士のお言付いひつけ通り、ここにこうして見せしめにして置くのでございます。今日で三日目でございます」

「して、その望月というのはいずれの家」

「あの森蔭から大きな冠木門かぶきもんが見えましよう、あれが望月様でございます、たいへんに大きなお家でございます。もしこの悪

者の余類が押しかけて来ないものでもない、このごろは用心が嚴重で、若い者を集めて夜昼よるひる劍術の稽古をやったり鉄砲などを備えて置きますから、あなた様にもその心持でおいでにならないと危のうございますぞ」

こんなことを話してくれましたから、兵馬は教えられた通りその望月家の門前へ走はせつけました。

兵馬は望月家の門前へ立つて案内を乞うと、なるほど広庭でもつて若い者が大勢、劍術の稽古をして喚おめき叫んでいました。

胴むしろばかり着けて薙むしろの上で勝負をながめていた若い者の頭かしらぶん分らしいのが出て来て、

「何の御用でござりまする」

「あの宮の辻と申すところに出ている梟首さうしゅくびのことに就いてお尋ね致しとうござるが」

「あ、あの梟首のことに就いて……そうでございますか、まあどうかこれへお掛けなすつて」

若い者の頭分は、そのことに就いて語ることを得意とするらしく、喜んで兵馬を母屋おもやの縁側へひくと、村の剣客連はその周囲へ集まつて来ました。

「今からちようど五日ほど前のことでございました。当家の望月様へ甲府の御勤番と言って立派な衣裳なりをしたお武士さむらいが二人、槍を立て家来を連れて乗込んで来ましたから、不意のことで当家でも驚きました。ちようどそれにおめでたいことのある最中でございましたから、なおさら驚きました。けれども疎略には致すことができませんから、町重ていちょうにお扱い申して御用の筋を伺うと、いよいよ驚いて慄ふるえ上つてしまいました。その勤番のお侍衆の言うことには、当家には公儀へ内密おびただに夥しい金銀が隠し

であるということを承わつてその検分に来た、さあ隠さずそれを出して了しまえば内ない済さいですましてやるが、さもない時には重罪に行うという申渡しなんでしょう。あんまり突然だしぬけに無法な御検分でございますから、当家の老主人も若主人も、親類も組合も土地の口利くちきぎもみんな呆あつ気けに取られてしまいました。尤も当家には金銀が無いわけではございませぬ、金銀があるにはあるのでございませぬ、他に類のない金銀が当家には蔵しまつてあるには違ちがひございませぬけれども、その蔵つてあるのはあるだけの由緒いわれがあつて蔵つてあるので、決して公儀へ内密だとか、隠し立てを致すとか、そんなわけなのじゃございませぬ、先祖代々金銀を貯えて置いてよろしいわけがあるんでございませぬから、まあそれからお聴き下さいまし……御存じでもございませうが甲州は金の出るところなんでございませぬ。金の出るのは国が上国じょうこくだ

からでございませう。その金の出ますうちにもこの辺では雨畑山、あまはたやま保村山、ほむらやま鳥葛山つづらやまなんというのが昔から有名なのでございませう。

いまでも入つてごらんになれば、昔掘つた金の坑あなの跡が、蛙の腸はらわたを拵げたように山の中へ幾筋も喰い込んでいまして、私共な

んども雨降り揚句なんぞにそこへ行つてみると、奥の方から押し流された砂金を見つけ出して拾つて来ることが度々ありまして、なにしろ金のこととでございませうから、それを取つて貯めておくとい代のうちには畑の二枚や三枚は買えるのでございませう。

けれどもそれでは濟まなと思つて、拾つた金はみんな当家へ持つて来てお預けしておくのでございませう。そうしますと当家では、年に幾度とお役人の検分がありまするたびにその金を献上し奉ると、お上かみからいくらかずつのお金が下るといふ仕組みになつているのでございませう。まあ話の順でございませうから

お聞き下さいまし、文武^{もんむ}天皇即位の五年、対馬国^{つしまのくに}より金を貢す、よつて年号を大宝^{たいほう}と改む^{たいほう}ということを国史略を読んだから私共は知っています。なにしろ金は天下の宝でございますから、私共が私しては済みませんので、今いう通り拾ったものまでみんな当家へ預けてお上へ差上げるようにしておりますくらいですから、当家でそれをクスネて置くなんていうことができるものではございません。当家にありまする金銀と申しますのは御先祖から伝わる由緒^{ゆいしよ}ある古金銀で、山から出るのとは別なんでしょう。その当家の御先祖というのは……当家の御先祖は権現様^{ごんげんさま}よりずっと古いのでございます。このあたりから金を盛んに掘り出しましたのは武田信玄公の時代でございます。もつともその前に掘り出したものも少しはございましたようけれど、信玄公の時が一番盛んで甲州金というのはその時から名に出たもので

ございます。権現様の世になつてからもずいぶん掘つたものでございますが、その金を掘る人足はみんなこの望月様におことわりを言わないと土地に入れなかつたもので、信玄公時代からの古い書付に、金掘りの頭を申付け候間、何方いずかたより金掘りまか罷り越し候とも当家へ申しことわり掘り申すべく、この旨をむねそむく者あるにおいてはク、セ、事なるべきものなりとあるんでございます。そのくらの旧家でございますから、代々積み貯えた金銀がちつとやそつと有つたところで不思議はございますまい、古金の大判から甲州丸形の松木の印金いんきん、古金の一両判、山下の一両金、露ろ一両、古金二分、延金のべがね、慶長金、十匁、三朱、太鼓判たいこぼん、竹流たけながしなんといつて、甲州金の見本が一通り当家の土蔵には納めてあるのでございます。それはなにも隠して置くんでもなんでもなく、お役人が後学のために見ておきたいとか、学者たち

が参考のために調べたいとかいう時には、いつでも主人が出して見せているのでございます。ところが今度来たお役人は、大枚三千両とか五千両とかの金銀を隠して置くに相違あるまい、それを出さなければ重罪に行うと言うのでございましょう、飛んでもないことでございます、当家の主人がそんな金銀を隠して置くような人でないことは、私共はじめ村の者がみんな保証を致します。そんなことはございませんとはいわけをしますと、どうでございましょう、若主人を引きつれてあの宿屋へ行つて拷問ごうもんにかけているのでございます。さあ三千両の金を出せば内済ないさいにしてやる、それを出さなければ甲府へ連れて行つて磔刑はりつけに行くと、こう言つて夜通し責めているのでございしますから、ちやうど婚礼最中の当家は上を下への大騒ぎで、村の大寄合いが始まつてその相談の上、年寄たちが土産物を持つて御機嫌伺

いに行つて、お願い下げにして来るといふことになりましたが、何の事に直ぐ追い帰されてしまつて取附く島がございませぬ。私共若い者たちは血の気が多うございますから、そんな没分曉わからずやの非義非道な役人は夜討ちをかけてやつつけてしまえと、勢揃せいぞろいまでしてみましたが、年寄たちがまあまあと留めるものですから我慢をしてみました、そうすると、いいあんばいにそこに立会つてきまりをつけてくれたのが一人のお武士おざむらいでございます。そのお武士は御病身と見えまして、その前からこの温泉で湯治をなすつていたのでございます、身体も悪いようでございましてが眼が潰つぶれておいでになりました」

「ナニ、目が潰れていた？」

前口上はどうでもよろしいが、これだけは聞き洩らすまじきことです。この男の口から語られた机竜之助の挙動はこうであ

りました——

擬まがい者ものの神尾主膳であつた折助の権六を一槍いっそうの下もとに床柱へ縫いつけた時、主膳の同僚木村は怒り心頭より発して、刀を抜き放つて竜之助に斬つてかかったが、脆もろくもその刀を奪い取られて、あつというまに首を打ち落されてしまつたから、一座は慄ふるえ上つてしまいました。

役人に附いて来た下人げにんどもは、もう手出しをする勇氣もありませんでしたが、今まで役人どものなすところを齒咬はがみをして口惜しがつていた望月方の者でさえも、これには青くなつてしまいました。口を利きいてくれることは有難いけれども、これではあんまりである、こんなにまでしてくれなくともよかつたものを、後難が怖ろしいと、誰も役人の殺されたことを痛快に思うものではなくて、かえつて竜之助の拳動ふるまいの慘酷さんこくなのに恨みを抱

くくらいでした。

「飛んでもないことが出来た、仮りにもお役人をこんなことにして、さあこれからの難儀の程が怖ろしい」

蒼くなつて口を利く者もなく、手を出す者もなかったのを竜之助が察して、

「心配することはない、これはほんものの甲府勤番の神尾主膳ではない、偽り者^{いつわ}である、その証拠には自分がほんものの神尾主膳への紹介状を持つているし、自分の友達はその神尾をよく知っている、これは近ごろ流行の浮浪の武士が、こんな狂言をして乗込んで金を盗ろう^ととして来た者だ、それだから二人とも殺してしまった、以後の見せしめにこの首を梟^{さら}し物^{もの}にしてやるがよい、後難は更に憂^{うれ}うるところはない、この二人が乗つて来た乗物の中へ自分が乗つて甲府へ行つて、この責^{せめ}は引受ける、

村の人たちにはかかり合いはさせぬ」

と言つて竜之助は、二人の偽役人にせやくにんが乗つて来た乗物にお伴ともの連中をそのままにして乗り込んでしまいました。お伴の連中が狐を馬に乗せたような面かおをして竜之助を荷になつてここを立つて行つたのは昨日の朝。

若い者の頭分は、それをいろいろな仕方話しかたばなしで竹刀しなひで型をして見せたりなんかして、だいぶ芝居がかりで話しました。ことに竜之助が槍で突いた時の呼吸や、一刀の下に首を打放ぶつぽなした時の仕草しぐさなどを見て来たようにやつて見せて、

「なにしろ強い人でございます、滅法界めつぽうかいもなく強い人でございます。あれから当家へおいでなすつた時に、こうして私共が剣術をしているのを見て……ではない、その様子を聞いています、さあこうして拙者わしが立つているから打ち込んでごらんと、

竹刀を片手にそこへ突立っておいでなさるところを、大勢して
覗ねらつて打ち込んでみましたけれども、どうしても身体さわへ触るこ
とができませんでした。眼が見えないであのくらいですから、
眼が見えたらどのくらい強いんだかわかりません」

「その盲目めくらの武士さむらいという者こそ、永年拙者が尋ねている人」
兵馬は一礼して、この家の門を出て行きました。

望月の家を走はせ出した兵馬が、この村をあとにしてもと来た
道。そこへちようど通りかかったのは、空馬からうまを引いた、背に男
の子を負おうた女。

「その馬はこれからどちらへ行きます」

「これから三里村を通しちめんざんつて七面山の方へ参るのでござんす」

「はて、それでは少し方角が違ちがうけれど、拙者はちと急ぎの用が

あつて甲府まで帰らねばならぬ者、お見受け申すに、馬は空荷からにの様子、せめてあの丸山峠を越すまでその馬をお貸し下さらぬか」

兵馬はその女の人に頼んでみました。

「お急ぎの御用とあらば……わたくしどもには少し廻りでござんすけれど、お貸し申してもよろしうございます、お乗りなさいませ」

兵馬は、この婦人が快く承知をしてくれたのを嬉しく思いました。

しかし、馬に乗りながら見るとこの婦人が、眼に涙を持つているのが不思議であります。

こうして宇津木兵馬は、またも甲府まで戻つて来てみましたところが、机竜之助の乗物が神尾主膳の邸内へ入り込んだことは確かに突き止めたけれども、それから先どこへ行つたか、それともこの邸内に留まっているものだから、その見当が一向つきませんから、ぜひなく非常手段に出でて、夜分ひそかに神尾の邸内へ忍び込んでみようと思ひました。

三日目の晩は雨が降つて風も少し吹いていたから、兵馬はそれを幸いに、城内の神尾が屋敷あたりまで密かに入り込んで夜の更くるのを待ち、追手濠の櫓下へ来て濠端の木蔭に身をひそませてゐる時分に、思いがけなく、濠の中からムツクと怪しい者が現われて来ました。片手には金箱かねばこのようなものを抱え、覆面して脇差を一本差し、怪しいと兵馬が思う間に、その男は金

箱を濠の端に置いて櫓の方へ、また取つて返しました。

まもなく櫓やぐらの下から、また一人の男、今度は金箱のようなものを背中に確しかと結びつけて、ムツクリと出て来ました。それと同時に前に取つて返した男、それもまたムツクリと出て来て、濠の中へ引っぱつた細引の縄を手繰り寄せ、その一端を前に置き放した金箱に結びつけて背中へ引ひきしよ背負つて、二人は煙の如く消えてしまいました。

そこには二重の怪しみがある。これはてつきり曲者くせものと思つた怪しみと、もう一つは、その曲者二人とも見覚えのあるような形。先に出て来たのが背と言ひ恰好かっこうと言ひ七兵衛そつくり、あとから来たのは片腕が無いようであつた。してみれば徳間とくまの山の中から拾つて来たあのが、んりきという男でもあろうか。

兵馬は実に不審に堪えませんでした。だいそれた甲府城内の

御金蔵破り、いま眼まのあたり見れば、それはドチラも自分の知つた人、のみならず自分が世話になつた人、つい幾日前まで同じ宿にいた人。あまりの不審に兵馬はあとを追いかけてみました。しかし、もうどこへ行つたか姿が見えません。

これを二人の方にしてからが解げせぬことであります。百蔵も江戸へ出て小商こあきないでもして堅気になると言い、七兵衛もそれを賛成したのに、まだこの辺とどこおに滞つていて、ついにこんなだいなされたことをやり出すようになったのか、さりとて測りがたないなりゆきと言わねばならぬ。

兵馬はそのことから、七兵衛なる者に対する疑点が深くになりました。もしも彼は表面あんなことにして、内実はこんな悪事を働いている人間ではなかつたか知ら。そうだと知れば、少なくともその世話になつたことのある自分にとつては一大事

だ。人は見かけによらぬもの、恃たのみがたないものであるわいと、兵馬も茫然ぼうぜんとして我を忘れていました。

その時に、追手おうての橋の方で提灯の光あまた。

「櫓下の御金蔵破り！ 出合え、出合え」

兵馬は気がつけば、危ないこと、自分も疑われるには充分な立場にいる。さてどちらへ避けたものと思つて見廻したが、どちらにも提灯。はて迷惑なことが出来たわいと思ひました。

兵馬はぜひなく覆面はすを外して追手通りの方へ引返しました。無論のこと、そこには警固の侍、足軽がたくさんいる、その網にひつかかるは覚悟の上で、ひっかかった時は尋常に言いわけをしようと思ひをきめてやつて来たが、果して、

「待て！」

バラバラと兵馬を取捲いて来た警固の者。

「神妙に致せ」

そこで兵馬は調べられてしまいました。

「今時分、何しにここへ来られた」

「ちと用事あつて」

「何用があつて」

「神尾主膳殿まで罷り越まかしたく」

「神尾主膳殿方へ？ して貴殿は何者」

「拙者は江戸麹町番町、旗本片柳伴次郎家中、宇津木兵馬と申す者」

「神尾殿とは御昵懇ごじつこんの間柄か」

「まだ御面会は致しませぬ」

「面識もないものが、この真夜中に人を訪ねるとは心得難し」

「大切の用向あるにより」

「大切の用向とは？」

「それは、御城内勤番衆二三の方にも知合いがあるにより、事情を述べれば委細明白のこと」

「その言いわけは暗い。他国の者、夜中やちゆうこのあたりを徘徊はいかい致すは不審の至り、尋常に繩にかからつしやい」

「繩に？」

「おしな温和しくお繩を頂戴致せ」

「繩にかかるような覚えはない」

「手向いさつしやるか」

「なかなか。繩をいただくべき覚えなきにより、手向い致す心もござらぬ」

「言い逃れを致さんとするか、不敵者」

「これは理不りふじん尽な」

兵馬の言いわけは聞き入れられませんでした。それで兵馬に縄をかけようと群むらがつて来た時に、その中から分別ありげな武士さむらいが一人出て来ました。

「お見受け申すところ、お年若のようでもあるし、両刀の身分、且かつは番町片柳殿の家中と申されるからには拙者にも多少の思い当りがござる、人違いして滅多なことがあつてはよろしくあるまい。しかしながら、今宵の大変に出会いなされたが貴殿にとつての不仕合せ故、ともかくも尋常に奉行まで御同行下さるよう。委細の申し開きは奉行に逢つてなさるがよろしかろうと存ずる」
こおうだやや 穏かに言われて、兵馬は大勢に困かこまれて勘定奉行の役宅かんじょうぶぎやうの方へ引かれて行つてしまいました。

兵馬は勘定奉行の役宅へ預けられて、ほとんど牢屋同様のところところでその夜を明かしました。夜は明けたけれども、兵馬の身

の明りあかは立たなくなりまして。

盗賊の行方ゆくえは一向わからない上に、彼らが忍び出でた痕跡こんせきのある濠端は、ちようど兵馬が通りかかったと同じ方向でした。その上に、兵馬は神尾主膳を尋ねると言っただけでも、神尾は兵馬なるものをいつこう知らないと言うし、それはとにかく、兵馬が何故に夜分あんなところへ来合せたかということが、誰にとつても解けぬ不審でありました。すべてが兵馬に不利になつてゆくから、気の毒にも兵馬は、獄に下されるよりほかに仕方のない羽目はめに陥りました。

三

さるほどに道庵先生がまた飛び出して来ました。どこへ飛び

出したかと言え、貧窮組ひんきゆうぐみの中へ飛び出して来ました。

この貧窮組というものが、前に申すように、山崎町の太郎たろういなり稲荷から始まるには始まったが、このくらい不得要領な組合もなかつたものです。幾百人の男女が市中を押廻かすつて、町の角や辻々へ大釜を据すえて、町内の物持から米やお菜かずを貰かつて来て粥かゆを炊たいて食くひ、食くつてしままうと鬨とぎの声を挙あげて、また次の町内へ繰く込んで貰かつて炊たいて食くひ歩くのです。その仲間に入いらないと受けが悪いから、相当の家の者共がみんないいっぱしの貧窮人らしい面つらをして粥を食くひ歩あく。食くつて歩あくだけで別に乱暴するではない。大塩平八郎が出て来るでもなければ、トロツキーが指図しずをするわけでもない。ただわわーつと騒さわいで歩あくだけのことだから、道庵先生が出現するには恰好かつこうの舞台です。

長者町の先生の家へ、町内の遊び人がやつて来て、

「今日はわつしどもの町内でも、いよいよ貧窮組をこしらえま
すから、こちら様でもお仲間入りをして下さるか、そうでなけ
れば、いくらか奉納を致してもらいてえんでございます。それ
ができませんければ、こつちにも覚悟があるんでございます」
と出ました。

それを聞いたから道庵先生が、飛び上つて喜びました。

「しめた」

草履を逆さにして、遊び人をそつちのけにして駈け出してし
まったわけです。

「ばかにしてやがら、貧窮組ならこつちが先達だ、おれに断り
なしに拵こしらえたのが不足なぐらいなもんだ、押しも押されもしね
え十八文だ、十八文の道庵は俺だ」

ちようど米友が柳原河岸へ行つてしまつた時分に、道庵先生

は昌平橋で大勢の貧窮組が粥を食っているところへ駈けつけました。

「さあ道庵が来たぞ、十八文の道庵は俺だ、見渡したところ、貧窮組の先達で俺の右へ出る奴はあるめえ」

自分から名乗りを上げてしまいました。元より道庵先生はこの近所で人気があるのです。人気がある上に、ちようどこういう舞台へ乗り出すにはうつつけの役者でしたから、一同がその名乗りを聞くと、やんやと言つて喝采かつさいしました。道庵先生の得意おも想うべしで、嬉し紛れに米俵を引いて来た大八車の上へ突立って演説をはじめてしまいました。

「さあ、皆の衆、俺は御存じの通り長者町の十八文だ、今度、皆の衆が貧窮組をこしらえたというのは近頃よい心がけで俺も感心した、俺に沙汰無しで拵えたことがちつとばかり不足といえ

ば不足だが、それは感心と差引いて埋合せておく。いつたい物持というやつが癩にさわる、歩ふが成金なりきんになつたような面つらをしやがつて、我々共が食うに困る時に、高い金を出して羅紗らしやなんぞを買い込みやがる。そこで皆の衆が物持から米や沢庵あじを持つて来てウント喰い倒してやるというのは、天道様てんとうさまの思召おぼしめしだ、実にいい心がけである、賛成！」

煽あおつてしまつたからたまらない。

「やんや」

「やんや」

四方から喝采が起る。道庵先生、いかめしい咳せきばら払いをして、「これから俺が先達になつてやるから安心しろ。しかし俺は大塩平八郎ではねえから、危なくなれば逃げるよ。俺に逃げられたくねえと思つたら乱暴をするな、人の物を取るな、女をいじ

めるな、役人が来たら俺も逃げるからみんなも逃げろ」

「やんや」

「やんや」

「あいたい相対で物を貰つて喰うには差支えねえ、人の物を盗とつたり乱暴をしたりすると、つか捉まつて首を斬られる、首を斬られるのは俺もいやだがお前たちもいやだろう、だから乱暴をしてはいけねえ」

この不得要領な貧窮組は、その夜は昌平橋際へ夜営をしてしまいました。このくらいの騒ぎだから役人の方へも聞えないはずはありません。けれども幕末の悲しさ、これを押えんためにとりかた捕方が向つて来る模様も見えませんでした。そうなつてみると貧窮組の組織は、決してこの一カ所にとどまらないことです。

江戸市中、至るところにこの貧窮組が出来てしまいました。

道庵先生の如きは興味を以てこの貧窮組に賛成をしたけれども、貧窮組に馳せ参ずるものすべてが、道庵先生の如き無邪気な煽動者ばかりではありません。と言つて幸いなことに、大塩もトロツキーも出て来なかつたから、それを天下国家の問題にまで持ち上げる豪傑は入つて来ないで、小無頼漢のうちの抜目のないのがこれを利用することになりました。

困つたのは道庵先生で、本業の医者をそつちのけにして貧窮組の太鼓を叩いて歩いています。因果なことに先生には、こんなことが飯よりも好きなので、ただ嬉しくてたまらないのです。嬉しまぎれに、一種の煽動者となつてしまつたけれど、時々穏健な説を唱えて、たいした乱暴を働かせまいと苦心しているのは感心なものです。

この貧窮組が昌平橋に夜営している時分に、これより程遠か

らぬところに住居すまいしている金貸しの忠作は、お絹と夕飯を食いながら、つぶや呟いて言うには、

「悪いことが流行はやり出した、ここは表通りではないけれど、そのうちには何か集めに来るだろう、その時は手厳てきびしく断わつてやる」

お絹はそれに対して、

「そんなことをして悪にくまれるといけないから、少しぐらい出してやった方がよいだろう」

「いけません、癖くせになるからいけません、あんな性質たちの悪い組合をお上が取締とらないというのが手緩てぬるい」

忠作は子供のくせに、このごろではもう前髪を落して、肩揚かたあげの取れた着物を着て、いっばしの大人ぶっています。

「でも、大勢おほいに悪にくまれてはつまらない」

お絹は氣のない面かおをしていたが、忠作はいつこう撓ひるまずに、

「貧乏な奴は日頃の心がけが悪いんだ、有る時は有るに任せて使つてしまい、無くなると有る奴を嫉そねんで、あんな騒ぎを持ち上げる、あんなのを増長させた日には、真面目まじめに稼かせいでいる者が災難だ、わしは鏹びたいちもん一文もあんなに出すのは御免だ」

「そんな一国いっごくなことを言つて、大勢の威勢で打壊ぶちこわしにでも会つた日には、ちつとやそつとの金では埋合せがつかない」

「たとえ打壊しに逢つたからと言つて、あんな筋の違つたやつらに物を出してやることはできません。あんなのが出来たために日済ひなしの寄りの悪いこと。いったい役人が何をぐずぐずしているんだろう、いちいち括くり上げて牢へぶち込むなり、首を斬るなりしてしまえばいいのだ」

こんなことを言っている時に、表の戸がガラリとあいて、

「へえ、御免下さいまし、町内でもいよいよ貧窮組をこしらえますから、お宅様でもどうか応分の御助力を願いたいもので」
ドヤドヤ入つて来たものがあります。

「それ、やつて来た」

忠作は苦い面かおをして玄関へ出て見ると、威勢のよい遊び人風をしたのが二三人先へ立つて、あとは雑多の貧窮組。

「へえ、御存じの通り町内でも貧窮組をこしらえましたから、こちら様でも、どなたかおいで下さるように。もしお手少なでございましたら、幾分か費用の寄進についていただきたいものでございます」

それを聞いた忠作は、

「せつかくでございしますが、私共は無ぶにん人でございますから」

「それではどうか、思召しの寄進をお願い申します、この通り

町内様でみんな賛成をしていただいたんでございますから」

帳面を繰りひろげて、鰻屋うなぎやでは米幾俵、薪炭屋すみやでは店の品幾駄いくだというように、それぞれ寄進の金高と品物の数が記されたのを見せると、

「宅うちなんぞはこの通り裏の方へ引込んでおりまして、とても表通りのお歴々と同じようなお附合いは致し兼ねます、どうかそれは御免なすつて下さいまし」

「それでは、誰か貧窮組へ出ておくんなさるか」

「宅は女と子供ばかりで」

「やい、ふざけやがるな、貧窮組を何だと思ってるんだ、ぐずぐず吐ぬかすとこつちにも了簡りょうけんがあるぞ」

「皆さんの方に了簡がおあんなさるなら、了簡通りになさいまし、宅では貧窮組なんぞへ入る人間は一人もございませんし、

そんなところへ出すお金なんぞ鏝一文もございません」

「何だと、この若造！ やい、みんな聞いたか、今のこの野郎の言草を聞いたか」

威勢のいい兄あにいが片肌を脱いでしまいました。それに続いた面々がみな眼を三角にする。

「貧窮組なんぞへ入る人間は一人もねえんだとよ、そんなところへ出す銭は鏝一文びたいちもんもねえんだとよ、みなさん方に了簡がおありなさるなら了簡通りになさいましと吐ぬかしたぜ。べらぼうめ、了簡通りにしなくってどうするものか、貧窮組を何だと思つてやがるんだ、憚はばかりながら貧窮組は貧乏人だ」

「ここの宅うちは、これで金貸しをしてやがるんだ、貧乏人泣かせの親玉はここの宅なんだ、いまのあのこましゃくれた若造が、あれで鬼みたような奴なんだ、主人はお妾上りだということだ、

金持を欺だまして絞り上げたその金で、高利を貸して、今度は貧乏人の生血いきちを絞ろうというやつらなんだ、だから貧窮組が嫌いなんだろう、誰も貧乏の好きな者はねえけれども、時世ときよじせつ時節だから仕方がねえや、ばかにするな」

「貧乏人がどうしたと言うんだい、そりや銭金ぜにかねづくでは敵かわねえけれど頭数あたまかずで来い、憚りながらこの通り、メダカのお日待ひまちのように貧乏人がウヨウヨいるんだ、これがみんなピーピーしているからそれで貧乏人なんだ、金があるといつてあんまり大きな面つらをするな、これだけの頭数はみんな貧乏人なんだ、逆さに振ふるったつて血も出ねえんだ、その貧乏人が組み合ったから貧窮組というんだ、貧乏でキュウキュウ言ってるからそれで貧窮組よ、ばかにするな」

大勢の貧窮組が口々に悪態あくたいをつき出したけれど、忠作は意地つ

張りで、

「何とおっしゃっても私共は、皆さんが貸せとおっしゃるから貸して上げるだけの商売でございます、なにも皆さんに筋の立たない金を差上げる由がございませんから」

こう言い切つて、玄関の戸をバタリと締めてしまつて、中へ引込んだから納まらない。

「それ、打壊してしまえ」

ついに貧窮組がこの家の打壊しをはじめました。

貧窮組の一手は、ついに忠作の家をこわし始めました。火をつけると近所が危ないから火はつけないで、門、塀、家財道具を滅茶滅茶に叩き壊します。忠作は素早く奥の間に駆け込んで、証文や在金の類ありがねを詰め込んで用心していた葛籠つづらの始末にかかるふくめんと、いつのまに入つて来たか覆面の大の男が二人、突立つてい

ました。

この大の男は、貧窮組とは非常に趣を異にして、その骨格のたくま逞しいところに、小倉こくらの袴はかまに朱鞘しゆざやを横たえた風采が、不得要領の貧窮組に見らるべき人体にんていではありません。忠作が始末をしてゐる葛籠のところへ来て、黙つて忠作の細腕をムズと掴んで捻ねじ倒すと同時に、一人の男はその葛籠を軽々と背負つて立ち上ります。

「どろぼう！」

忠作が武者振りむしやぶつくのを一堪ひとたまりもなく蹴倒けたおす、蹴られて忠作は悶絶もんぜつする、大の男二人は悠々ゆうゆうとしてその葛籠を背負つて裏手から姿を消す。

貧窮組は表から盛んに叩きこわしていたが、いいかげん叩きこわしてしまうと、鬨ときの声を揚げて引上げました。

もとより宿意あつての貧窮組ではないから二度まで盛り返して来ず、昌平橋へ行つてお粥かゆを食つています。貧窮組はこのくらい、無邪気といえは無邪気なものだけれど、合点のゆかないのは朱鞘しゅざやを横たえた小倉袴の覆面の大の男。表で無邪気な貧窮組を騒がしておいて、金目の物を引浚ひっさらつて裏から消えてしまうというのは、武士にあるまじき行いでありませう。

この勢いで貧窮組は江戸の市中へ蔓延まんえんして、ついには貧窮組へ入らなければ人間でないようになってしまいました。男ばかりではない、女も入らなければならぬようになりました。職人は職人同士、芸人は芸人同士で貧窮組を作らなければならぬ義務が出来て、まんにち貧窮組に加入していかないことが知れようものなら、人間の仲間を外されて非人の仲間へ組入れられなければならぬになりました。そうして貧窮組はついに江戸市

中を風靡ふうびしてしまつたけれど、その不得要領なことはいつまでたつても不得要領で、お粥を食つて歩くこと、せいぜい忠作の家を叩き壊すくらいのところであつたが、解げせぬのはその貧窮組が騒いで行つたあとで、必ず貧窮組らしくない仕業しわざが二つ三つは必ず残されていることです。この手段は前の忠作の家を荒した時と同じような手段で、表で貧窮組が騒いでいる時、裏で、前に見る通り、朱鞘を差した堂々たる武士が仕事をするのであります。

その強奪ごうだつの仕方があまりに大胆で大袈裟おおげさで、しかも遮おさえる人があつても人命を殺あやめるようなことはなく、衣類や小道具などには眼もくれず、纏まとまつた金だけを引渡ひきさらつて悠々として出て行く。不得要領でどこまでも拡がつてゆく貧窮組。それと脈絡があつてこの強盜武士に要領を得さするものとすれば、貧窮組も決し

て不得要領ではないけれど、貧窮組にそんなアクドい根のないことは、その成立の動機が煙みたようなのでわかるし、そのなりゆきがお粥以上に出でないのわかります。しからばその貧窮組を表にして、それとは全く没交渉ぼつこうしやうでありながら、巧みたくにそれをダシに使って大金を奪い歩く武士さむらい体の強盗は果して何者。そうしてその盗った金を何事に使用するのだらう。市中の大商人で、この朱鞘たの武士の強奪に会ったものは無数であつたけれども、後の祟りたを怖れてそれを表立って申し出でない。申し出でも当時の幕府の威勢では、それを充分に取締るの力さえなかつたものです。

徳川幕府の影が薄くなつて、そのお膝元ひざもとでさえこの始末。

貧窮組がこうして不得要領の騒ぎを続け、浪士と覚おぼしき強盜が蔭へ廻つて悪事を働き、なお火事場泥棒式の悪漢が出没するけれども、それを取締とりかたる捕方は出て来るといふ評判だけで、ちつとも出て来ません。

人形町の唐物屋とうぶつやを貧窮組が叩き壊した時は、朝の十時頃から始めて家から土蔵まで粉のように叩き壊してしまいました。いくら多勢の力だからと言つて、これは人間業とは思われませんでした。表の店の鉄の棒が、飴ねじを捻ねじるように捻切つてありました。それを捻切つたのは十五六の子供であつたということ、それは天狗の子に相違ないということ、天狗の子供が先に立つて、大勢の指図をして歩くのだといふようなことが言い触らされました。

「天誅」の文字が江戸の市中にも流行り出して来て、市民を戦慄させたのはそれから幾らもたたない時でありました。この「天誅」の文字は大和の「天誅組」から筋を引いたものかどうかかわからないが、武士と武士との間に行わるるのみではなく、町人にまで及びます。ひそかに人の首を斬つて、橋の上や辻々へ捨札と共に掛けて置きます。市民の財産の危険はようやく生命の危険に脅かされてきました。

さても本所の鐘撞堂の相模屋という夜鷹宿へ、やつと落着いた米友は、お君から何かの便りがあるかと思つて、前に両国の見世物を追い出された晩、お君と二人で宿を取つた木賃宿へ行つて様子を聞いて、まだ何も消息がないと聞いて失望して、帰りがけに、両国橋を渡りかかると、多くの人が橋の上に立っていますから、米友もなにげなく覗いて見ました。米友ではとても

人の上から覗き込むことはできないから、人の腰の下から潜るもぐようにして見ると、橋の欄干らんかんへ板札が結び付けてあります。米友は学者（お君に言わせれば）ですから直ぐにその板の文句を讀むことができました。

「本所相生町二丁目箱屋惣兵衛、右の者商人の身ながら元來まひなひきん賄金を請ひ、府下の模様を内通致し、剩あまつぎへ婦人を貪り候段、不届至極につき、一夜天誅を加へ両国橋上に梟さらし候所、何者の仕業に候哉や、取片附け候段、不届且かつ不心得につき、必ず吟味を遂げ同罪に行ふべき者也。

月 日

報国有志

此高札三日の内、取片附け候者有これあら之づば、役人たりとも探索の

上、必ず天誅すべきもの也」

米友はその文句を読んでしまつたが、腑ふに落ちないことがありました。

「この札はこりや誰が立てたんだ」

米友は独言ひとりごとのように聞いてみましたけれど、誰も返事をするものがありません。

「この高札三日の内、取片付け候者あらば、役人たりとも探索の上、必ず天誅すべきもの也てえのは穩かだねえ」

米友が仔細しさいらしくこんなことを言い出したから、集まつていた人は、それを聞いて滑稽に思うよりは怖ろしく感じました。そうして何者がそんなことを言うかと思つて、声の出たところをよく見ると、人の股またの間にモゴモゴしている米友でしたから、みんなプツと吹き出しました。

米友にとつては笑われる自分よりも、笑うやつらの方がおかしい。単純な米友は、理由なきに冷笑されたことを不本意として、ムツとしてきました。

「何がおかしいんだい、俺らの言うことが何がおかしいんだい」
「若い衆、そう怒るもんじゃねえよ」

米友がムキになつたのをなだめたのは老人。

「こりゃ天誅組というやつなんだから、お役人でも始末にいかねえんだ」

「天誅組というのは何でございます、お爺さん」

米友は老人の面を見上げる。

「天誅組というのは、このごろ流行り出した悪い貼紙で、
瘡瘡神ほうそうがみよりもつと剣呑な流行神だ」
「けんのんはやりがみ

「そんな剣呑な流行神を平気で眺めている奴の気が知れねえ」

見物はまたドツと笑い出して、

「うむ、全く気が知れねえ、若い衆、お前なんとかひとつ、その流行神を始末してみねえな、人助けになるぜ」

「ばかにするな」

米友が眼をクルクルして群集を見廻した、その面つきと身体からだを見て群集はやはり笑わずにはいられません。高札こうさつよりもこの方がよほど見栄みばえがあると思つて、

「豪えらい！」

拍手喝采してこの奇妙な小男の、本気になつて憤慨するのを弥次やじり立てて楽しもうとすると、米友はかえつてそれらを相手にはしないので、欄干に結びつけてあつた高札の縄目を解きにかつたから、

「おやおや」

弥次連の面かおの色が変わります。

「おい、若い衆、小せえの、何をするんだい」

慌あわてて留めたのは老人。

「冗談じょうだんじゃねえ、煽おたてに乗るも大概がいい、その高札へお前、指でも差そうものなら、大変なことになるぜ、引込んでいなせえ、いなせえ」

「ナニ、かまわねえ」

「三日の内、取片付け候者あらば、役人たりとも探索の上、必ず天誅すべきものなり——この字がお前にも読めたんだろう、天誅というのは首が飛ぶことなんだ、いいかい、この高札を動かそうものなら、お前の首がなくなるんだ、お前が遠からず首を斬られてしまうんだぜ」

「誰が俺らの首を斬りに来るんだ」

「天誅だよ、天誅だよ」

「天誅が首を斬りに来るのか。天誅というのは何だ、俺らはまだ天誅に首を斬られるような悪いことをした覚えはねえ」

米友は留めてくれる老人の手を振り払って苦もなく高札の縄を解いてしまい、その高札を振り上げて橋の上から川の中へポンと投げ込んでしまいました。

「無茶なことをする奴だ」

さすがの弥次馬やじうまも舌を振ふるつてしまいました。

これが不思議な縁で米友は、その翌日から本所の相生町あいおいちようの箱屋惣兵衛一家の留守番になってしまいました。それで鐘撞堂かねつきどうの相模屋から気軽にそこへ移つてしまいました。

この縁は昨日の高札の一件からであります。米友が高札を川

へ抛り込んだために、町内からこの家の留守番を押つけられた
ものです。

米友もまた押つけられたことをかえって幸いにして箱惣の留
守番を欣んで引受けてしまいました。

米友が留守番を押つけられた箱惣の家は大きな家でした。け
れども誰も一人も住んではいないのです、ガラあきです。ただ
の空家と違って誰も留守居をし、手のない空家なのです。昨日、
米友が投げ込んだ札の文句にも、「本所相生町二丁目箱屋惣兵
衛、右の者商人の身ながら元来賄金を請ひ、府下の模様を内通
致し、剩へ婦人を貪り候段……」とある通り、浪士たちに悪ま
れてツイこの間の晩、首を斬られて、両国橋へ梟し物にかけら
れた惣兵衛の家です。その首が誰がどうしたか直ぐに片附けら
れてしまうと、その後へ立てられた高札がすなわち米友の川へ

投げ込んだものであります。その後難こうなんの人身御供ひとみごくうの意味で留守居を押付けられ、米友は、主人の居間であつた贅沢ぜいたくな一間でゴロリと横になつてゐる。その傍には例によつて槍が一本あります。

何者が来るか知らないが、仕返しに来たらこの槍で挨拶をしてやる。もとの主人には何か恨むところがあるかも知れないが、自分は疚やましいところがないと、ひとりで力りきんでいたけれど、二晩三晩というものは、サツパリ何も手答こたえがないから、米友も力ちから瘤こぶが弛ゆるんできました。四晩目の晩、雨が降つて鬱陶うつとうしいものだから、行灯あんどんの下で、やはり寝ころんで絵草紙を見ていました。

「今晚は——今晚は」

二声目で初めて気がついた米友は、外で呼ぶのが女の声で、表の大戸を軽く叩いてゐるようでしたから、

「今晚は」

返事をして次の文句を待っていました、不思議なことにそれッきり。

「おかしいな、人を呼びつ放しにして引込むなんて」

「今晚は」

「返事をしているじゃねえか、何か用があるのかい」

「あの、仕出し屋でございませうが……」

ナンダ、いつも弁当を運んでくれる仕出し屋か、弁当ならば、もう食べてしまったから入用いりようはないと思つて、

「弁当箱を取りに来たのかい」

「そうではございません、若い衆さんに一口上げてくれと町内から頼まれました」

「ナニ、俺おいらに一口上げてくれつて？ そんな人はいねえはず

だが」

「どうかここをおあけなすつて下さいまし」

「どうもおかしいな」

米友はおかしいと思ひながら戸をあけると、いつも来る仕出し屋の女が、丸に山を書いた番傘ばんがさを被かぶつて岡持おかもちを提げて立っています。

「俺らに御馳走してくれるというのは誰だろう」

「町内の衆でございます」

「町内の誰だろう」

「ただ町内から届けたと、そういえばわかると申しました」

「俺らの方ではよくわからねえ」

米友は一合の酒と鰻うなぎの井いを受取りました。仕出し屋の女は帰つてしまいます。米友は、またもとのところへ帰つて、鰻の井と

一合の酒を前に置いて、しきりにそれをながめていました。一合の酒も飲んでみたくないことはない、鰻の井も食欲を刺戟しないこともない、けれども町内の誰がよこしたんだか、それがわからないのが不足である。うっかり御馳走になつていいものだかどうか……米友は一合の酒と鰻の井を後生大事ごしょうだいじに睨にらめていました。

一合の酒と鰻の井を睨にらめている米友。

「飲んでしまおうか、それとも飲まずにいた方がいいか、この鰻の井も食つてしまえばそれまでだが、食わずに置いてみたところでそれまでだ」

米友はいろいろに考えてみたが結局、この無名の贈り主から贈られた酒は一滴も飲まず、井ひとはしは一箸も附けずひとはしにほつておく方がよろしいと覚悟をして、床の間の方へ持つて行つて飾つて置

きました。飾つて置いてそれをやや遠くからまた暫らくながめていたが、

「こうして俺らに酒を飲ましておいて、酔ったところを見計らつて計略にかけるつもりだとすると、そんな計略にひっかかつても詰らねえ」

誰も米友を毒殺しようというほどの物好きもなからうけれど、米友の方でとうとう一合の酒と鰻の井を敬遠してしまつて、それからまた本を見だしていると、

「今晚は」

「またも表で人の声、前と同じように女の声。」

「誰だ」

「仕出し屋でございます」

「ちエツ、また仕出し屋か」

「まことに相済みませんが、先程のお井と御酒ごしゅは間違いました」
「ナニ、間違えたって？」

「御近所へ持つて上るのを、つい間違えまして申しわけがございません」

「そんなことだろうと思つた、俺らに御馳走してくれる奴はな
いはずなんだから」

米友は跛足びっこを引きながら、いま床の間へ飾つて置いた一合の酒と井、果して手を付けなかつたことの幸いを感じて、それをそっくり持つて来てやりました。仕出し屋の女中の方では、食われてしまつてもこちらの粗忽そこつだから文句のないところへ、米友が手を付けずに返してくれたのだから大へん喜びました。

「気をつけなくつちやいけねえ、俺らだから手を付けなかつたが、ほかの者なら食つてしまふんだ、俺らも実は食つてしまお

うかどうしようかといろいろ考えたんだ」

「どうも相済みません」

仕出し屋の女はきまりの悪い面かおをして、一合の酒と鰻の丼を持って急いで敷居を跨またいで外へ出ました。米友は一合の酒と鰻の丼の香においばかりで妙な面をして見送っていたが、表を二三間も歩いたと思われる仕出し屋の女中が、

「あれ——」

ガチャン、ピシーンという音。それによつて見ると、女中はその辺で転んで倒れて泥濘ぬかるみの中へ、せつかくの一合の酒も鰻の丼もみんなブチまけてしまったようですから、米友は舌打ちをして、

「だから言わねえことじゃあねえや、そそっかしい女だなあ」
潜くぐり戸どから面かおを出して、雨の降る暗いところで転んだ女中を

たしなめようとする途端、

「静かにしろ」

その潜り戸から跳り込んだ二人、小倉の袴に朱鞘に覆面、背恰好とも、忠作の家で金目の葛籠を奪つて裏口から悠々と逃げた強盗武士そのままの男であります。

「さあ来やがった」

覚悟の上。米友は不自由な足ながら傘のお化けのように後ろへ飛んで返つて、以前の一間に置いてあつた槍を手に取りました。

「待つてたんだ、両国橋の立札を川ん中へ抛り込んだのは俺らの仕業に違えねえ、さあ何とでもしてみろ、宇治山田の米友の槍を一本くらわせてやる」

米友の槍は、これを侮つても侮らなくても防ぐことはむずか

しいものです。

「呀ッ」

内へ転げないで外へ転げた覆面の浪士は、米友の一槍で太股ふともものあたりをズブリと刺されたらしい。

五

せつかく金貸しを始めた忠作、あの夜の騒ぎから滅茶滅茶になつてしまつて、お絹はどこへ行つたか行き方が知れないし、金目の物はことごとく奪われてしまいました。

「癩しやくにさわる、あの貧窮組というやつが癩しやくにさわる。それにあの浪人者。浪人者というやつがあつちにもこつちにもウロウロして事あれかすと覘ねらつていやがる。貧窮組というやつはワイワ

イ騒ぐだけだが、浪人者というやつは大ビラで強盗ぬすつとをして歩くようなものだ。こうして歩いているうちにはどこかで出会でくわすだろう、出会したら後をつけて手証てしようを押えて町奉行へ訴え出るんだ。こつちも意地だ、キツト尻尾しっぽを捉まえて見せる、おれの家から取って行ったものだけは、取り返さなくっておくものか」

忠作は齒嚙みをしながら、このごろでは毎夜、蕎麦屋そばやの荷物を担かついで、蕎麦は売ったり売らなかつたりして、夜遅くまで市中を歩いて佐久間町の裏長屋へ帰ります。今宵は浅草方面から売り歩いて両国橋手前まで来ると、

「駕籠屋」

闇の中から人の声。それに呼ばれて朦朧もうろうの辻駕籠つじかごが、

「へえ」

と言つて振返つた。とある家の用水桶の蔭に真黒な二人、両方

とも長い刀を差しています。そこで駕籠屋を不意に呼びかけたから駕籠屋も驚いたようであつたし、通りかかった忠作も少し驚きました。

「駕籠をこれへ持つて参れ」

「どうもお気の毒さま、これから蔵前くらまえのお得意まで行くんでございますから」

「黙れ！ 黙つて駕籠を持つて来い」

嚇おどかしておいて、長いのをスラリと引抜くのではなく、懐中から投げ出したのは若干の酒料さかてらしい。

用水桶の蔭に隠れていた浪人体ていの怪しの者は、背に引きかけていた一人を勞いたわつて駕籠の中へ入れると、

「旦那、どこまで行くんでございます」

「黙つて拙者の行くところまで行けばよい」

駕籠側わきに一人が附添ついでうて無暗むやみに走り出しました。

それを見ていた忠作は、何と思つたか蕎麦屋の荷物を抛り出して、一目散いちもくさんに駕籠の跡を追いかけてました。

神田へ出て、日本橋を通つて、丸の内へ入つて、芝へ出て、あたごした愛宕下の通りをまだ真直ぐにどこまでともなく飛ばせる。ついに駕籠は芝の山内さんないへ入る。丸山の五重の塔、その五重の塔の姿が丸山の上に浮き立っているのを横目に睨にらんで、土塀つちべいだの、板塀いたべいの物見だの、長屋だの、いくつも廻つて駕籠が飛んで行く。左右を見廻すと、やっぱり丸山の五重の塔。はてそれでは、あの塔のまわりをグルグル廻っているのかな。

そう思っているうちに、大きな土塀つづきで、右の五重の塔と向き合つたところに堂々たる黒塗の大門がある。その堂々たる大門のなかへ駕籠はスツスツと入つて行きました。

何者の邸であるうか知らないが、入って行った者も武士の姿こそしているが、その仕業しわざは武士ではない。この家から出てそういうことをさせるはずもなからうし、外からそういうことをした者を内へ黙って入れるはずもなからうと、忠作が思つていと、門番がいるのかいないのか知らないが、無事にスーツとその駕籠は門内へ納まつてしまいました。

あの駕籠が通れるくらいなら自分も通れるだろうと忠作も、続いて入り込もうとすると、

「コラ、誰かッ」

いかずち
雷いかづちのような一喝。

「今のおの乗物の……お乗物の」

「乗物がどうした」

「あれは当家の御家中のお侍でございますか」

「馬鹿！」

頭から一喝した仁王のような門番が取つて食いそうな権幕けんまくですから、忠作は怖ろしくなつて飛び出しながら、黒塗の堂々たる大門を見上げると、正面三カ所に轡くつわの紋があります。

この門をよく見直すと、左右に門番があつて、屋根は銅葺どうぶきの破風造りはふづく、鬼瓦おにがわらの代りに撞木しゅもくのようなものが置いてあります。

土塀を一周り廻つた忠作が通りの町家で聞いてみると、これは薩州鹿兒島の島津家の門だと知れました。

鹿兒島の島津家といえは九州第一の大大名。その門と邸の結構の堂々たることはさもあるべきことだが、わからないのはそこから強盗が出て町家を荒して歩くということ。あの二人の者はたしかに自分の家へ入つた浪人体ていの強盗。その一人はどうやら手傷を負うたらしい一味の者。

それを無事に門内へ入れたところを見ると、これは疑うべくもなきこの邸内の人、そうしてみれば薩州の家来には、強盗を内職にしている者があるはずである。いかに乱世とは言いながら、大名の家来が強盗を内職にしているというのは、あるべきことではありません。

その晩はそれで帰つて翌日、忠作は神田佐久間町の裏長屋を引払つて、この薩州の屋敷の傍へうつることにしました。幸い、三田の越後屋という蕎麦屋そばやに雇人の口があつたから、すぐそこへ雇われました。忠作がこの蕎麦屋へ奉公して見ると、この界限かいわいの物騒なことは、神田や本所のそれ以上でありました。越後屋は大きな蕎麦屋で、奥座敷などがいくつもあるが、その奥座敷はしばしば一癖ありげな侍に借り切られることがあります。忠作は算勘さんかんが利きいて才気があつたから、出前持をせずに帳場へ坐

らせられることになつて三日目の晩、店へ現われた田舎者体の男と計らず面を見合せて、

「おや、お前さんは……」

「お前さんは……」

これは甲州の、徳間入とくまいりの川の中以来の会見であつて、田舎者らしい男は七兵衛であります。

七兵衛は奥座敷を一つ借り切つて、そこで一人で飲んで、暫らくして忠作がやつて来て一別以来の話になりました。

お絹のことや、がんりきがなりきのことが出て、七兵衛はかなり忠作をからかつていたが、

「私の姪めいがこの蜂須賀はちすか様に御奉公ごほうこうをしているんで、それでこうしてやつて来ましたよ」

六

七兵衛がここで姪と言うたのはお松のことでありませう。お松はこの時分、徳島藩の中屋敷へ奉公をしておりました。徳島藩の中屋敷は薩州の邸とは塀一つを隔てたところにあつて、お松はそこに奉公してから日もまだ浅いけれども、目上にも朋輩ほうばいにも信用され可愛がられて、前に神尾の邸にいた時のような危ないことは更になし、まことに無事に暮しておりました。

この際お松は、今までにない一つの縁談をほのめかされまして。この話は至極しごく実直に持ちかけられ、そうして自分の身を落着けるには、決してためにならないところではないし、自分もまた身を落着けてから、見込んで世話した人の鑑識めがねを裏切るよ

うなことはないつもりだと、自信はしているけれども、お松はどうしてもそれを承諾する気にはなれませんでした。

断わるならば何と言って断わろうか知ら、それが一つの難題で、せつかくあ言つてくれる親切を無下むげに断わつてしまえば、おたがいに気まざくなつて、また自分はこのお邸を出なければならぬことになるかも知れぬ、そうなるとまた落着くところに迷うかも知れぬ。お松はその晩、散々さんざんにこのことを考えてしましました。

無事に暮らしていたけれども、兵馬のことを考えないわけにはゆきません。兵馬のことは忘れたことはないのに、幾度もそれを考え直さねばならなくなりました。

深いようで浅い二人の縁、浅いようで深い二人の間、お松にはそれをどうしてよいのかわからない。兄妹のようにして永ら

く一緒にいたけれど、どうも物足りない。兵馬その人に不足はないけれど、自分よりは仇討の方をだいじがる兵馬が、お松にはどうしても物足りないのです。

と言つて兵馬さんは、わたしを可愛がらないのではない、わたしをいちばん可愛がつているし、わたしもまた兵馬さんがいちばん可愛ゆいけれども、それだけでは頼りがない。わたしがここでほかへお嫁に行つてしまつても、兵馬さんは口惜しいとも悲しいとも思ひはしないで、かえつて祝つて下さるでしょう、それでは詰らない。お嫁に行つてしまつたのを、喜んでくれるような可愛がり方では詰らない、とお松はそれを物足りなく思いました。駿河するがの清水港で別れてから、船と共に江戸へ着いたお松。船頭が徳島藩の出入りでここへ世話をされて来てから、兵馬の便りは一度、甲府からあつただけでした。七兵

衛は二度ばかり訪ねてくれたけれども、いつも風のように来て風のように帰ってしまふ。

その度毎に手紙を書いて置いて、それを兵馬の手許てもとに届けてもらうことをお松は何よりの楽しみにしていました。近いうちまた七兵衛が来るはず、お松はこのごろ、部屋にさがると毎夜のように手紙を書くことばかり。今もいろいろと思ひ悩まされた揚句あげくが、その思ひだけを紙にうつすことによつて、その憂うさを晴らそうとしました。

お松は自分の今の生活が至極しごく平穩無事であること、御殿でも皆の人に可愛がられて昔のような心配は更まにないこと、朝夕ほうばいしゅう朋輩衆と笑いながら働いていることなどを細々こまこまと書きました。自分の身はそんなに無事幸福であるけれども、江戸市中は日に増し物騒きょうきになつて行つて、兇器きょうきを抜いた浪人者が横行したり、貧窮組

が出来たり、この末世はどうなつて行くことかと市民が心配していること、それゆえ滅多めったに外出はできないこと、附近に薩州を初め内藤家、久留米藩くろめなどの大きな屋敷があつて、ことに隣りの薩州家などは浪人者がたくさんに入入りして、朝夕戦場のように見えることもあるけれど、こちらのお屋敷は静かであることなどを書きました。そうして幾度か読み直したりした上で、封をしてしまいました。

それを枕元に置いてお松は床に就きましたが、兵馬のことを夢に見ました。夢に見た兵馬は嬉しい人であつたが、やっぱり物足りない人でありました。

翌朝起きて見ると、昨夜書いて机の上に乗せて置いた自分の手紙の上に、それとは全く別の人の書いた一封の手紙が載せてあります。

「誰が置いて行つたのでしよう」

お松はその手紙を取り上げて見ると、七兵衛の手蹟しゆせきでありました。

封を切つて読むと、

「兵馬様の身の上に変事が出来たから急に相談したい、少しばかり暇を願つて、越後屋まで来るように」

とのことであります。

お松は胸が潰つぶれる思いがして、すぐさま朋輩に頼んで少しばかりの暇をこしらえて、越後屋の奥座敷へ訪ねてみますと、七兵衛が待つていました。

「突然にああ言つてやつたから驚いたろう。困つたことが出来たというのは、兵馬さんが縛られて、甲府の牢へ入れられてしまったことだ」

「ええ、あの方が縛られて牢へ？　それはいつたい、どうしたわけでございます」

「そのわけにはなかなか入り組んだ仔細しさいがあるのだが、人違いなのだ、人違いで捉まって、甲府の牢へ入れられている。運は悪く、悪いところへ通りかかったのが兵馬さんの因果、身の明りの立つまでは、ああして甲府の牢内に窮命きゆうめいしておいでなさらなくてはならぬえ」

「どうしてそんな悪いところへ通りかかったのでございます」
「盗賊どろぼうだ、盗賊のかかり合いだ」

「盗賊！　そんなことはありませんまい、なんと間違つて兵馬さんが盗賊なんぞと……そんな間違いのあるはずがございませんもの。伯父さん、早く心配して、兵馬さんの身の明りが立つようにしてあげてください」

「それについて、俺も実に困つたのだ、とてもあたりまえの
だてで兵馬さんの明りを立てることはできないから、仕方がな
いからお前に相談に来たのよ」

「だつて伯父さん、盗賊をしない者が盗賊の罪を被^きるなんて、お
役人だつてわかりそうなもの、盗賊をするような人としらない人
とは一目見てわかりそうなもの、伯父さんが早く行つて、兵馬
さんはそんな人ではございませんと明りを立てておやりなされ
ば、お役人が直ぐに御承知になりそうなものではございません
か」

「いや、役人も兵馬さんが盗賊するような人でないことはよく
御存じなのだが、どうもちょうど、御金蔵へ盗賊が入つた晩、兵
馬さんがちゃんと身拵えをしていたのだから、どうしても、ほ
んものの盗賊が出て来るまでは、兵馬さんは赦^{ゆる}されまいとこう

思うのだ」

「そんなら早く、そのほんものの盗賊が捉まるように骨を折つて上げてくださいませ」

「それはずいぶん骨を折るけれども、なにしろ悪いことをするような奴だから、どこにいて、いつ捉まるかわからねえ。それについてお松、お前に相談だが、俺がひとつ兵馬さんを牢内から盗み出して来るから、お前どこかへ兵馬さんを当分かくしてくれないか」

「ええ？ 兵馬さんを御牢内から盗み出して来るって、伯父さんが？」

お松は眼を睜みはつて、

「伯父さん、そんなことをしないで、お役人によく仔細わけを話して、そうでなければほかにその道の人を頼んで、兵馬さんを助

けるようにして上げてくださいまし、お上の牢内かみから盗み出すなんて、そんな危ないことをしてはおたがいのためにならないではありませんか」

「それだ、なにしろ今の時勢はこんな時勢だから、真直ぐなことばかりは通らねえのだ、あたりまえのことをしていた日にはトテモ、急に兵馬さんを助け出すことはできねえのだ」

「困ったことでございますねえ、御牢内のおかかりよりも、もつと上のお役人を頼んでお願いをしてみたらどうでございませう」

「そこに一つの当りがねえわけではねえのだ、実はあの方の係りが、お前の知っている神尾主膳様よ」

「神尾主膳様？ ああの伝馬町の、わたしの元の御主人様が……」
「いかにも。その神尾様がこちらを失敗しくじつたものだから、甲府

詰おおせつを仰付おほせつかつたのだ。お旗本で甲府詰になるのはよくよくで、

もう二度と浮ぶ瀬うきせがないようなものだ。それであるの神尾様も甲府へ行つて、自暴やけはんぶん半分はんぶんになかなかよくないことをなさるそうだ」

「そんなら伯父さん、その神尾様が御牢内の方のお係りでありましたら、わたしがこれからあちらへ行つてお願い申してみましよう、兵馬さんは決してそんな悪いことをなさる人ではないということ、わたしから神尾の殿様によく申し上げて、お願い申してみましよう」

「それなんだ、お前も一旦の御主人であつてみれば、お前から願つてみれば聞いて下さるかも知れぬ。と言つて、あの殿様はなかなか性質たぢのよくない殿様だ、お前がとりなしたために、かえつてよけいな面倒が起りはしないかと、俺はそれを心配するよ」

「神尾の殿様だつて、まるつきり物のおわかりにならないお方ではございませぬ、わたしが一生懸命になつてお願いをしてみたら、きつとお聞入れ下さることと思います。もしそれでいけませんでしたら、伯父さんのおつしやる通り、兵馬さんを盗み出すなりどうなりしたがようございましょう、そうなればわたしも覚悟をしますから、どんなにしても兵馬さんをお隠し申します」

「なるほど……しかし、お前も今は主人持ち、ここで甲府まで出かけるといふわけにはゆくまいからな」

「行きますとも、甲府まででもどこまででも参りますとも、ほかのこととは違いますから、わたしはどんなにしても、こちらのお暇をいただいて甲府へ参ります」

「もし暇が出なかつたらお前はどうする」

「お暇が出なければ……わたしはお邸を逃げ出してもよろしく
ございます」

「なるほど……」

七兵衛が暫く考えていましたが、

「お前がそこまで了簡りようけんをきめてくれたなら、俺はひとつお前を連
れて甲府へ乗り込むことにしてみよう。素直すなおにお暇の出ないこ
とは知れているから、今夜、わしが人目に立たぬようにお前の
ところへ迎いに行く、それまでに身の廻りの物を用意して待つ
ているがいい。それからお邸の間取り、お前の部屋の案内を聞
かしておいてもらいたい」

そこで七兵衛はお松から、邸の内部の模様をややくわしく聞
き取って、二人はこの店を別れました。

お松は七兵衛と別れて、越後屋の奥座敷を出て、薩州邸の長い土塀をグルリと廻つて徳島藩の裏門を入りました。

その晩、お松はいろいろの思いで手近のものを用意して、日が暮れるのを待ち兼ね、日が暮れると、夜の更ふけるのを待ち兼ねていました。ほかの女中たちは、昼の疲れで早くから眠つてしまいました。お松は女中部屋の戸を細目にあけて待ち構えています。

屋敷の庭には大きな池があつて、池の向うには高い火の見櫓が立っています。お松が夜更けて七兵衛の合図を待つ時分に、この火の見櫓の上に二つの黒い影法師がありました。共に夜番や火の番の類たぐいではなく、覆面をして両刀を差して一人は手にがんどう籠燈

を携えていました。この二人の武士は相当に身分あるものらしく、櫓やぐらの上から、目の下に見ゆる薩州邸の内を仔細に見ていました。そうして一人の丈たけの高い方が、矢立やたてと紙を取り出しては見取図を作っていました。

お松はそこに人のあることは知らないで、一心に七兵衛の合図ばかりを待っていると、池の中へトボンと礫つぶての音。

その音を聞いて、お松は立ち上りました。戸を細目にあけると、闇の中ながら、今どこからともなく落ちて来た礫が、池の水を動かして波紋がゆらゆらと汀みぎわの水草の根を揺ゆすっているのを見て、お松は胸を轟とどろかしながら四辺あたりを見廻しました。続いて第二の礫の音。

この時、火の見櫓の上で見取図を作っていた丈の高い方が、「今の音は？」

聞きとがめると、

「池の中で魚が跳ねたのでござろう」

背の低い方が答える。

「魚の跳ねる音ではなかったようだ」

「と云うてこの夜中に——」

「ともかく、あの音は礫の音。ことによると、薩州の方で誰かここを認めた奴があるかも知れぬ」

「油断はなり申さぬ」

薩州邸内の見取図を作っていた二人の武士は、櫓やぐらの上から前後左右を警戒すると、背の高いのが急に紙と筆を下へ投げ捨て、
るように差置いて、

「怪しい奴」

手裏剣しゅりけんを抜いて発矢はつしと投げる。投げた方角は薩州邸の馬場か

ら此邸こちらの隔ての塀あたり。低い方の武士は下に伏せてあつた龕燈かんとろうを手早く持ち直してその方角に突きつけると、池の上を飛ぶように汀みぎわを走つて女中部屋の方へ行く怪しの者。

二人の武士は高いところにいたから、怪しい者の影を龕燈の光に照しては見ただけれど、大きな声を揚げて屋敷の中を騒がすべく遠慮するところがあつたものらしい。それで、

「怪しい奴」

「取逃がしたか」

と火の見櫓の上で面を見合せて、空しく下の闇を立つて見てみると、池のほとりで、

「何者だ！」

「呀あつ！」

ざんぶと水の中へ落ち込んだような物の音。

「出合え、出合え、いま女中部屋へ曲者くせものが入った、早く出合え」
ちようどこの時、邸外を通り合せたのが白金しろがねに屯所とんしょを置くしようないはんじゆんらたい
庄内藩の巡邏隊じゆんらたいでした。短い槍と小銃たずさを携えた四人の隊士が一人の伍長に率いられて、三田通りを巡邏してこの邸の外まで来た時に、邸内で曲者あり出合えという声を聞いたから、そこで五人が一時に立ちどまりました。

「御同役、何かこの邸内で変事がござったようじゃ」

「左様、何か物騒がしい」

市中取締りが、この時分には町奉行の手だけでおさまりのつか
なかつたことは前に言う通りであつたから、幕府は譜代の大名と
五千石以上の旗本えらを扱えらんで、それぞれ持場持場を定めて八百八街はっぴやくやまち
を巡邏させたのであります。そうして、もつとも危険区域と
された三田の藩州附近、伊皿子いさらご、二本榎にほんえのき、猿町、白金辺しろがねを持場

として割当てられたのが荘内藩であります。

この荘内の巡邏隊は今、徳島藩邸内の騒ぎを聞いて、足を留めて中の様子を窺つてうかがいると、脇門わきもんがギーツとあいて、そこから形を現わしたのが、以前火の見櫓で絵図面を取っていた覆面のふたり。

「さてこそ！」

巡邏隊は短槍と小銃とを二人につきつける。

「これは巡邏隊の諸君か、お役目御苦労」

中から出て来たふたりは、かえつて心安げに言葉をかけたが、こつちは油断をしないで、

「名乗らつしやい、我々は荘内藩の巡邏隊でござる」

「拙者かみは上の山やまの金子六左衛門」

大きいのが答えると、低い方が、

「拙者は堤作右衛門」

上の山の金子六左衛門は六左衛門で通る人でありました。六左衛門というよりも、その一名与三郎の方が通りがよかつたこともあります。さきに新徴組が清川八郎を覘ねらう時、しばしばその金子の家で会合したことがあります。金子は新徴組の連中と交わりがよかつたばかりでなく、そのころ聞えたる各藩士及び志士とはたいいてい往来していました。その主張するところは幕府を佐たすけて尊王の志を成さんとするのであります。朝廷と幕府との間の調和をはかるがためには、非常に働いた人でありました。藩内では家老であり、その時代には一種の志士として畏敬いけいされていたのであつたから、荘内藩の巡邏隊はそれを聞いて、やや意を安んずるところあつて、

「これはこれは、上の山の金子殿でござつたか、それとは知ら

ず失礼を致しました。我々は白金屯所の荘内藩巡邏隊、拙者は伍長の齋藤角助と申す者」

と名乗りました。

そこで齋藤角助は隊士に、槍と鉄砲を引かせ、

「この邸内が物騒がしいようでござるが……」

「いかにも。ただいま怪しい奴が忍び込んで、女を一人奪つて逃げたと申すこと」

「女を奪つて逃げた？ それは聞捨てならぬこと」

「あの土塀を乗り越えて逃げたとやらだが、まだ遠くへは行くまいと思われる」

「諸君、追蒐おっかけて見給え」

それはやり過ぎしてしまつて金子六左衛門は、先に立つて歩きながら堤作右衛門を顧みて、

「一網打尽にやつてしまわねばいかぬわい」

という。堤はそれに答えて、

「いかにも。思いのほか念が入った仕方でござるな」

「不屈きなやつらじゃ、誰か大きな頭があつて指図をしているのに違いない、中の様子はまるで要塞だ。いざと言えば幕府の兵を引受けて防戦する覚悟でいるから、まず謀叛と見ても差支えない」

「お膝元を怖れぬ振舞じゃ。もし大きな頭があつて、その指図とあらば、このままに置くは幕府の威信にかかわる」

六左衛門と作右衛門の話は徳島藩邸内で女が浚われたということとは全く別な話で、こうして二人は、三田通りの越後屋まで引上げて来ました。

この頃、また上野の山下へ一軒の変った床屋が出来ました。

変ったといつても店の体裁ていさいや職人小僧たくいの類、お客の扱いに別に

変ったところはなく、「銀床ぎんどこ」という看板、鬢盥びんだらい、尻敷板しりしきいた、毛受けうけ、

手水盥ちようずだらひの類までべつだん世間並みの床屋と変ったことはない。

ただ一つ変っているのは、この主人がてんぼうであつたことだけであります。

どうしたわけかこの床の主人には右の片腕がありません。滅多には店へ出て来ないけれども、職人小僧の使いぶりは上手であるらしい。

この床屋の店先で、

「どうです、皆さん、大きな声では読めねえがこんなものが出

ましたぜ」

「何でございます」

「まあ、読むからお聞きなさいまし」

「聞きやしよう」

懐ろから番附様のものを取り出して、お客の一人が、

「ようございますか、恐れながら売弘めのため口上……」

「なるほど」

「此度徳川の橋詰に店出仕り候家餅いへもちと申すは、本家和歌山屋に

て菊の千代と申弘め来り候も、此度相改め新製を加へ極ごくあめり

かに仕立趣向したて仕り候処つかまつ、これまで京都堺町にて売弘め候牡丹餅ぼたもち

も少し流行に後れ強慾おくに過ぎ候、三条通にて山の内餅をつき込

み……」

「ははアなるほど、御養君の一件だね、誰がこしらえたかたい

「そうなるものを拵こしらえたものだが、うつかりそんなものは読めねえ」
「十二、御威勢の盛んな時分ならこんなものを拵える奴もなからう、拵えたつて世間へ持つて出せるものではねえが、何しろ今のような時勢だから、公方様くぼうさまの悪口でも何でもこうして版行はんこうになつて出るんだ」

「それだつてお前、滅多めったにそんな物を持つて歩かねえがいいぜ、岡ッ引の耳にでも入つてみる、ただでは済まされねえ」

「大丈夫だよ、何しろ公方様の御威勢はもう地に落ちたんだから、とてもおさまりはつかねえのだ、ああやつて貧窮組が出来たり、浪人強盗が流行はやつたり、天誅てんちゆうが持ち上つたりしている世の中だ」

「悪い悪い、公方様の悪口なんぞを言つては悪いぞ」

「かまうものか、公方様も今時の公方様は、よつほどエライ公

方様が出なくちやあ納まりがつかねえ、このお江戸の町の中で、お旗本よりもお国侍の方が鼻息が荒いんだから、もう公方様の天下も末だ」

「なんだと、この野郎」

「なんでもねえ、実地のところを言ってるんだ」

「野郎、ふざけたことを吐ぬかすな、このお膝元ひざもとで、永らく公方様の御恩になつていながら、公方様の悪口を言うなんて飛んでもねえ野郎だ」

雑談が口論となり、口論が喧嘩になろうとするところへ、

「まあまあ、皆さん、お静かになさいまし」

現われたのは、問題の片手のない中剃りの上手な親方なかぞ。

「憎い野郎だ、公方様の悪口なんぞを言やがって」

一人は余憤よふんぼつぼつ勃々。それを銀床の親方はなだめて、

「少し酔っぱらつてるようでございますね」

「太え野郎だ、どうも眼つきがおかしいから、あんな奴が薩摩の廻し者なんだろう」

「ナニ、御酒のかけんでございますよ」

親方がしきりになだめているところへ、

「これ神妙にしろ、いま公儀へ対して無礼の言を吐いたものは誰だ」

ズカズカと茶袋ちやふくろが一人入つて来ました。入つて来ると共に茶袋は、店前みせさきに落ちていた紙片を手早く拾い取つて、威丈高いたけだかに店の者を睨にらみつけます。

茶袋というのは、幕府がこのごろ募集しかけた歩兵のことです、つつそで筒袖はかまじしを着て袴腰のあるズボンを穿はいているからそれでそう言つたもので、あんまり良い人が集まらなかつたから、多くは市中

の破落戸ならずものを集めたものであります。どうも仕方がないからこの破落戸を集めて、歩兵隊を組織して西洋流に訓練をさせていたが、本来破落戸であつたのが急に茶袋を穿き、かりそめにも二本差すようになったから、これらの連中の威張り方といつたらない。それで市民は茶袋茶袋といつてゲジゲジのように思つていたものです。今も今とて、公方様の不敬問題で口論した揚句のところへこの茶袋がやつて来たから、床の者はみんな悪い奴が来たなと思ひました。

「公方様へ対して悪口を申し上げるなんて、そんなことは決してあるものじゃございません」

腕のない親方が詫わびをいう。

「黙れ黙れ、ここにいる客人のうちで、公方様の悪口を申し上げた奴がある、恐れ多くも今の公方様では納まりがつかぬ、浪

人者の方が旗本よりもズツト鼻息が荒いなどと、高声こうせいで噪さわいでいたと知らせて来た者がある。誰がそのように無礼なことを申したか名乗つて出ろ、これへ名乗つて出ろ。名乗つて出なければ店の者共を片つぱしから引括ひっくくる」

どうも相手が悪い、と店の者は震え上りました。

「そんなわけではございません……実は」

最後の口論の相手になった男、しかもそれは公方様を悪く言つたのではなく、公方様を悪く言つたのを憤慨ふんがいした方が何か申しわけをしようとする、

「貴様だろう、無礼者め！」

茶袋は飛んで行つてその男の横面よこつらをピシリと打つて、その手を逆に捻ひねり上げてしまいましたから、

「ア、これは、これは、滅相めつそうなことをなされますな、私は公方

様の悪口なんて、そんなことを申し上げた覚えはございません」

「いや、貴様に違いない、お膝元に住居致し、永らく徳川家の御

恩を蒙りながら、公儀に対して悪口を申すとは言語道断な奴」

「いえいえ、私が高んでそのようなことを申しましょう、実は……

私の方でそれをとめましたので、そんなことを言つては恐れ多

いとそれをとめましたのでございますから……飛んでもない、

私がそんなことを」

「こいつが、こいつが、自分の罪を人になすりつけようと致す

か、いよいよ以て凶々しい奴」

茶袋はその口を捻じ上げました。それを見兼ねて片腕の親方

が割つて出で、

「これは歩兵様、まあお聞きなすつて下さいまし、このお方は

決して左様なことを申し上げたのではございません、実はこう

いうわけなんでございます」

「貴様は何だ」

「私はこの店の亭主でございます、銀と申します、私が細かいことを存じておりますから、どうかお手をおゆるめなすつて、一通りお聞きなすつて下さいまし」

「貴様、知っているならなぜ最初から知つてると申さん、正直に言つてみる」

「公方様の悪口を申し上げるほどのことではございません、ただ話の調子でございまして、ツイ威勢のいいことを申しましたのが、少しばかり声が高くなりましたので。それもこのお方はございませぬ、そんなことを申しましたお客様はたつた今お帰りになつてしまいましたので。このお客様なんぞは傍わきで聞いておりまして、そんなことを言つてはよくなかろうぜと氣をつ

けて上げたくらいでございます。どう致しまして公方様の悪口なんて、私風情わたしふぜいがそんなことを申し上げようものなら口が曲つてしまいます。この方はそれをお留め申しただけでございませぬ、どうか御勘弁なすつて下さいまし」

「ナニ、この男が悪口を申し上げたのではない、ほかの客が言つたのをこの男が留めたのだと？　しからばその客というのは誰だ」

「それはただいまお帰りになりました」

「帰つた？　帰つたところで貴様の店の得意だろうから所番地は知つてるだろう、何の町の何というものだ、さあそれを言え」

「それがちょうどお通りがかりのお客でございまして、ツイお名前もところもお聞き申しておきませんでございました」

「白々しらじらしい言いわけを申すな。どうも当節は、ややもすればお

上の御威光を軽く見る奴があつて奇怪きつかいじや、見せしめのために厳しくせんければならん。亭主、この上かれこれ申すと貴様も同罪だぞ」

「飛んでもないことで。どうかそのお方はお許しなすつて下さいまし、そのお方が悪いことを申し上げたのでないことは、どこまでも私共が証人でございます」

「喧やかましい、強たつてこいつが悪口を申し上げたことでないとならば、その本人をここへ連れて来い。その本人が出て、私が申しました、恐れ入りましたと白状した時に限つてこいつを許してやる」

「それは御無理と申すもので。まるつきり証拠も何もないことでお捕つかまえなさるのはあんまり御無理なこと……」

「ナニ、証拠がないから無理だと？ 証拠呼ばわりをして言い抜

けをしようなどとは、いよいよ以て凶々しい。証拠が有ろうとも無かろうとも、我々歩兵隊の耳に入った以上は退引のつびきのならぬことじゃ。しかし、理非曲直が立たねば政道も立たぬ道理じゃ、歩兵隊は無理を言わぬという証拠にその証拠を見せてやる。これ見ろ、これはいま貴様の家の店前みせさきで拾ったものじゃ、さあこれを見たら文句はあるまい」

突き出したのは、この店へ入りがけに茶袋が拾った一枚の紙。それはいま読んだ「恐れ乍ながら売弘うりひろめの為の口上、家伝いゑもち、別製煉ねりやうくん」と書いた、紛れもなく今の將軍家を誹謗ひぼうしたすりもの刷物です。悪い奴に、悪い物を拾われました。

「この証拠を見た上は文句はあるまい。文句のない上に、亭主、貴様の罪が重くなつたぞ。さあ、拙者と同道して、両人共に我々の兵營まかまで罷り出ろ。あとのやつらは神妙に待っておれ、お差

凶があるまでここを動いてはならん」

この危急存亡の秋ときに、天なる哉、命めいなる哉、ゆらりゆらりとこの店へ繰くりこ込んだものがありました。それは別人ならず、長者町の道庵先生でありました。

「親方、これはどうしたというものだ」

道庵先生はぬかおからぬ面。

九

「おや、これは長者町の先生、おいでなさいまし。実はこういうわけなんで……」

片腕かみゆいどこのない髪結床の亭主は手短かにこの場の仔細を物語ると、

道庵は感心したような面かおをして聞いていました。が、

「ははあなるほど、それは歩兵さんのお聞き違いだろう。時に歩兵さん、わたしはこの長者町に住んでいる道庵と違って、長者町ではかなり面の古い男でございますから、どうか私にお任せなすつて下さいまし」

「相成らん、引込んでいろ」

「そんなことをおつしやらずに、私にお任せなすつて下さいまし、男に不足もございませうが、どうか道庵の面を立ててお任せなすつて下さいまし」

「くだい、ほかのこととは違つて苟且かりそめにも上様の悪口を申し上げた奴、その分には捨て置き難い」

「そんなことをおつしやらずに、まあお任せなすつて下さいましよ」

道庵先生は幽霊のような変てこな手つきをして、突然茶袋の首根つ子へかじりつくようにしましたから、茶袋は腹が立つやらおかしいやら、

「無礼な奴、控ひかえろ」

「歩兵さん、そんなことをおつしやつてはいけませんよ、第一、私にしたところで、ここにいろお客にしたところで、みんなこのお江戸で育った人たちですよ、江戸に生れた人で権現様のおかげを蒙らぬ人はござんすまい、その権現様以来の上様の悪口なんぞを申し上げる者が、江戸っ子の中にあるわけのものではございませんよ、ですからそれは嘘うそにきまつていますよ、私が成り代つてこの通りお詫わびを致しますから、今日のところははおめに見てやつておくんなさんしよう」

道庵先生だつて、責任のあるところへ出て口を利かせれば、

そう無茶ばかり言うものではありません。相当の条理を立てて詫びていると、茶袋はいよいよつけあがり、

「貴様は、今ここへ来たばかりで何も事情を知らん、その事情を知らん者が、でしやばって仲裁ふりをすると猪口才だ。こつちには確かに訴え出でた人もあり、この通り証拠もある。なお申し開くことがあれば屯所へ出てから申せ、貴様も証人として出たくば引張つてやる」

歩兵はうるさいから、道庵の胸倉むなぐらを取つて嚇おどかすと、

「歩兵さん、歩兵さん、まあお待ちなさいまし、どうか穏かに話を致そうではございませんか。いったいあなた様方は、町奉行や酒井様などのような、古手といったは失敬だが、旧式のお役人と違って、こうして開けて来た西洋の新式の調練を受けておいでなさる歩兵さんでございましょう、それですから、モウ

少し話がわかりそうなものでございますね」

と言つて道庵は、自分の胸倉を取つた歩兵の腕を逆に取り返しました。逆に取り返したと言つても、それを逆指ぎやくゆびや片胸捕りかたむねとで鮮かにとつちめて、大向うを唸うならせるような芸当がこの先生にできるはずはないが、不思議なことに、荒つぽく道庵の胸倉を取つた茶袋が、それを逆に取り返されると、甚だおとなしくその手を外はずして、

「うむ、そう言われればなるほどだ、我々は町奉行や新徴組のような融通の利かぬ者共とは違つて、新式の調練を受けているものだ、高島流の砲術も江川流の測量も一切心得ている」

「左様でございましょうとも。人の胸倉を取るなんとということ、みんな旧式の兵隊のすることです、歩兵さんに限つてそんなことはございません、やつぱり西洋流に、こうして握

手ということをなさるんでございませうね」

歩兵が存外おとな温和しく外した手を、道庵先生が握り締めると、

「ははあ、貴様はなかなか話せる、医者だけあつて脈みやくどころ処どころがうまいわい」

茶袋は急にニコニコしてきました。

今まで威張りくさっていた茶袋が、急に面かおを崩して、

「貴様は話せる」

と言つて道庵と握手をして、

「よしよし、万事貴様に任せてやる、貴様からこの者共をよく説諭せつゆしてやるがよい、拙者も今日のところは特別の穩便おんびんを以て聞捨てにして遣つかわす」

「いや、どうも有難うございます」

道庵は額を丁と拍うつて、取つて附けたようなお辞儀をした時

分には、せつかく包みかけた道庵が危なく転げ出してきました。

「貴様は少々酔っているようだな」

「へえ、いつでも酔っぱらっているのでございます、町内では酔っぱらいで御厄介になつていたのでございます」

何かわからないことを言つてまたお辞儀をする。茶袋はその形をおかしがつて^{じゅうめん}渋面を作り、

「以来、気をつけろ」

と言つて出て行つてしまいました。道庵先生の出る幕は、大抵のことが茶番になつてしまいます。夫婦喧嘩でもなんでも、道庵ひとたび出づれば大抵は茶にして納まりをつける。それが時としては道庵の一徳であり、時としては道庵先生の人格を軽くする所以^{ゆえん}となることもあります。しかしながらこの場の働きは、たしかに先生の器量を一段と上げてしまいました。なんとなれ

ばこれはお鍋や八公の夫婦喧嘩とは違つて、相手が始末の悪い茶袋ときていたところへ、事は上様の不敬問題だから、屯所へ引張られた上は、まず生命は覚束おぼつかないものと思わなければならぬ。それを道庵が出て易々やすやすと解決をつけてしまったから、今まで黒山のように人だかりしていた連中が、ここで一度に哄どっと喝采かつさいしました。そうして口々に先生の器量を讃ほめる言葉を記してみるとこういうことになります。

「どうぞでげす、あの道庵さんは大したものじゃあございませんか、お前さんごらんなすつたか、ああしていったん胸倉を取られたところを道庵さんが逆に取り返した、あすこが見物みものなんのでげす、あれがその、柔術やわらの方で逆指といつて、左の指の甲の方からこうして掴つかんで、掌を上の方へこう向けて強くあげるんでげすな、そうするとそれ、指を取られた方は、騒げば騒ぐほど

こつちがその拳を自分の方へ向けてこう曲げるものですから、指が折れてしまう。柔術やわらと取りの名人にああして指を取られてしまったが最後、もう動きがつくことじゃあございませぬからな、それでさすがの茶袋も我がを折って降参してしまいました」

「さよですか、あの先生がそんな柔術取りの名人とは今まで知らなかった、酔っぱらってひっくり返ってばかりいるから腰抜けかと思つたら、やつぱりそれじゃあ、なんでござんすかな、道庵先生は柔術の方もちやあんと心得ているのでございませぬな」

「そこがそれ、能ある鷹たかは爪を隠すと言うんで、先生、ああしてしらばつくれて酔っぱらっているけれど、武芸十八般ことごとく胸へ畳み込んでみやくどころいるところを俺はちやんと見て取つた、その上にお医者さんで脈みやくどころ処どころを心得ているから鬼に金棒でございま

すよ」

「なるほど。それにしてもおかしいのは、あの茶袋が道庵先生に手を取られると、痛いとも痒いともかゆいう面かおをしないで、ニコニコと笑ったところがわかりませんな」

「いやそうではない、あの茶袋もあれで柔術にかけてはなかなかの取り手だが、何しろ道庵先生に会つてはその敵でないと、つまり自分に心得があるだけに、彼を知り己おのれを知るんでげすな、だから指を取られるとすぐに、お前は話せると言つて莞爾にっこりと笑つて、尋常に引上げたところがあれで味のあるところで、道庵さんが敵をとつちめながら、ペコペコお辞儀をして先を立てておく呼吸なんぞも、なかなか見上げたものでございますな、エライものでございます」

輿論よろんは往々、土偶人形どくにんぎょうをも偉大なものに担かぎ上げてしまいま

す。道庵先生もここで暫く輿論の勝利者となりました。

そのあとで床屋の親方は、道庵先生を座敷へ招いて一口差上げ、

「先生、おかげさまで助かりました。いつたいどうしたわけでござります」

「あははは」

道庵先生は笑って、

「あれは二両取りという新手だ、あれで首尾よくとつちめてしまった」

「いや町内では、もう大変な評判で、さつきから入り代り立ち代りお札にやって来ますが、なんでも先生が柔術の達人で、茶袋を手玉に取って投げたと言つて騒いでいますが、その二両取りというのは、やはり柔術の手なんでございますかね」

「あはははは」

道庵はいちだんと大口をあけて笑い、

「柔術やわらの手だとも、俺が新発明の柔術の新手だわい、尤もつとも古い

型を少しは取り入れてあるんだがな、それを場合に当って器用ほどこに施し用いたというのが拙者の働きさ」

「その型をひとつ、伝授を受けたいものでございますね」

「あはははは、いいとも、一二両取りの型をひとつ話してやろう。まず最初に茶袋が、わしの胸倉を取った時、その手先を逆に取り返したわたしの働きを見たかい。あの時それ、そつと一両握らしてやった」

「なるほど」

「そうして利目ききめのところを見ていると、グンニヤリと来たから、

こいつは手答えがあるわいと、それを下へ持つて行つて西洋流

の握手をやる時にまた一両、それで都合二両取り、わしの方から言えば二両取られだ、それでスツカリ柔術が利いてしまった。二両取りの新手というのは、つまりそれだけのものさ」

「なるほど、そんなことだろうと思つて、私もあの時にお手の中を見ていました。私の方でその手を先に用いさえすれば何のことはなかつたのでございますが、あの茶袋の言い分があんまり癢しやくにさわるものでございますからツイ持前が出て、先生に落ちを取られてしまいました、申しわけのないことでございます」

「それはそうと親方、お前さんは何かこの道庵ないうちに内緒ないしよの頼みがあると言いなすつたから、それで俺わしはやつて来たのだが、内密ないしよの頼みというのはいつたい何だね」

「そりや先生、ほんとうに内密なんでしょうがね、本人も先生ならばというし、私共も先生をお見かけ申してお願いの筋

があるんでございますがね」

「たいへん改まったね、この呑んだくれをまたいやに買い被つたね」

「全く先生をお見かけ申しておすが継り申すんでございますから」

「気味が悪いな、そうお見かけ申して、見かけ倒しにされてしまつてはたまらねえ、あんまりお継り申されて引き倒されてもやりきれねえが、男と見込んで頼まれりや、おれも道庵だ、ずいぶん頼まれてみねえ限りもねえのさ」

「実は先生、人を一人預かつていただきたいんでございますがね。ただ預かつていただくんならどこでもよろしうございますが、暫らく隠して置いていただきたいんでございます。先生ならば預ける方も安心、預けられる方も安心なんでございますから」

「俺に人を隠匿えといふのか。そりや大方謀叛人とか兇状持ちとか、碌な奴じゃあるめえ。いくら男と見込んで頼まれても、そんなのを預かるのは御免蒙りてえが、それも事と品によつては、ずいぶん引受けてみねえ限りもねえのさ。まあ、どんな人間だか言つてみてごらん」

「先生、謀叛人とか兇状持ちとか、そんな物騒な人じゃございません、女の子でございます、女の子を一人、預かっていただきたいんでございますが」

ここで片腕のない床屋の親方というのが、が、ん、り、き、の百蔵の變形であること申すまでもありません。道庵先生は、百蔵の口から何事か頼まれると、

「遠くの親類より、近くの他人ということもあるて」と言つて、飄々とその床屋を出かけてしまいました。

道庵がこの床を出て行くと、入れ違いに、

「少々ものを承りとうございます」

こまた小股の切れ上った女が、小風呂敷を抱えて店前に立って、

「おや百蔵さん」

と言つて驚きました。これは女軽業の棟梁お角とらりようであります。

それから百蔵がお角を連れて、山下の雁鍋がんなべへ来て飲みながら

の話、

「親方、おかげさまで全く助かりました、近いうち両国でまた一旗揚げる都合ですから、どうぞ御贔負ごひいきを頼みます」

「それはまあよかつた。甲府へ残して置いた連中もみんな、無事でいなすつたかね」

「ええ、みんな無事でおりましたが、ただ一人だけどうしても

見つからないんですよ。あれがわたしども一座の花形なんです
が、火事場からどこへ行ったか、焼け死んだ様子もないから、
どこかへ逃げたんだらうと、よく土地の人に頼んでおきました、
広いところではありませんから、そのうちに見つかるだらうと
思っていますよ。あれが見つかりさえすれば、一人も欠けずに
面かおが揃いますけれど、そうでなくつても、近いうちに花々しく
やってみる当りが附きましたのは、みんな親方のおかげでござ
んすよ。あの時に親方がいて下さらなければ、一座の者は目も
当てられない醜態ぎさまになつてしまふところでした」

「俺も少しばかりのお金が、お前さんのお役に立つて嬉しいと
いうものだ」

「それから親方、府中でお目にかかった時は、お前さんはたし
か、百蔵さんとおつしやいましたが、ここで銀造さんとおつしや

るのは、どういふわけでございます」

「百蔵の方は近ごろ通りが悪いから、それで銀造と変えたのだ、銀造というのが餓鬼がきの時分からの名前さ、これから百の方はやめにして銀の方だけにしてもらいたい。もう一つの頼みは、なるべく甲州ということを書いてもらいたくねえのだ、お前と俺との馴染なじみもあの時限りのことにして、人が聞いたら、兄貴だとか親類だとか言つて済ましておいてもらいてえのだ」

「ようございますとも。それはそうと親方、お前さんは、ほんとうにおかみさんがないのですか。あの時のお話では、おかみさんは三年前亡なくなつたようなお話でしたけれど、なんだかあてになりませんね」

「ナニ、嘘をつくものか、おかみさんなんぞはありやしねえ」
「それがやつぱり嘘でございますよ」

「それじゃなにか、俺におかみさんがあるというのかね」

「ありますとも、大あります」

「こいつは聞き物だね。無いものでも有ると言われりや悪い気持はしねえが、お前からそう言われると、どうやら痛くねえ腹を探られるようだ」

「申しわけをするだけ弱味があるんですね、隠したって駄目ですよ」

「驚いたね、ああして、男世帯の銀床ぎんどこに無えねものは女つ気と亭主の片腕だと、町内でこんな評判を立てられているところへ、お前だけが俺に濡衣ぬれぎぬを着せようというものだ」

「そりゃいけません、ここの家に女つ気が有るか無いかということ、一目見れば直ぐにわかりますよ、女は細かいところへ気がつきますからね」

「それでは、俺の家に女がいるというのかね」

「そうですとも」

こんなことから痴話が嵩じてゆきました。

十

その時分、根岸に住んでいたお絹が、今日は小女こおんなを連れて、どこの奥様かという風をして、山下を歩いて帰ります。

雁鍋がんなべの前へ来た時に、見たような人がその店から出かけたのに気がつきました。

男と女と二人で微酔ほろよいきげん機嫌で店を出かけたうちの男の方が、東海道下りから甲州入りまで附纏つきまとつて来たが、んり、きの百蔵に相違ないから、お絹は自分の面かおを隠そうとしました。

しかし向うはちつとも気がつかないで、二人で笑いながら話し合つて歩いて行きます。片腕の無い百蔵は前と変らず元気なもので、身なりなども小綺麗にしているのです。女はと見れば、これは眉を落した年増としまでなかなか美しい女でした。

お絹はそれを見ると、むらむらと嫉ねたましくなりました。自分
はなにもがんりきほに惚れてはいない、東海道で附纏われた時も、
内心では軽蔑けいべつしながら調子を合せて来たが、男はなかなかしつ
こい。しつこいほど面白がつて翻弄ほんろう気取りで一緒に来て、とう
とう腕を一本落させることにしてしまつて、死ぬか生きるかで
ウンウン唸うなっているのを、山の中へ置きばなしで逃げ出して、
その時は、さすがに気の毒と思わないでもなかつたが、思い出
した時分には、柄にない男ぶりをしてわたしを張りにかかった、
その罰はああしたものと腹の中で笑っているくらいでしたが、

今その男がこうしてピンピンしている上に、他女あだしおんなと摺すれつもつれつして歩くところを見ると、お絹は自分勝手な嫉ねたみをはじめてしまいました。

「そういうわけなら、あの子をわたしは預かりましょうよ」
それとも知らず、男女の話は甘つたるい。

「そんなことはできねえ」

百蔵はわざとらしく首を振ります。

「そんなに、わたしという者に信用が置けないの」

「お前に預けて売物にでもされた日には、せつかくの生娘きむすめが台無しだ」

「わたしはまた、お前さんが預かつて食物くいものにしやしないかと、それが心配だ」

「預かり物を食う奴があるものか」

「どうだかわかりやしない、猫に鯉節かつぶしを預けたようなものだから」

「第一、おれに食われるような娘じゃねえ、お邸奉公を勤めていた娘で、堅いことこの上なしだ、友達の義理で退引のつびきならず預かってはみたものの、おれも実は心配なのだ」

「預けた方も心配でしょう」

「心配というのはそんなことじゃねえが、いつまでも俺のところにへ置けねえわけがあるのだから、それで今日、よそへ預け換える約束をしてしまったのだ」

「どこへ預けようと言うの」

「どこでもいいじゃねえか」

「それを言わないと放さない」

人目の薄いのをいいことにして、二人は肩と肩とを突き合せ

て、こんなことを話しながら行くのを、お絹はみんな聞いてしまつて、この男も女も憎らしくなりました。よし、どこへ行くか、行く先を突きとめてやろうという気になりました。

「詰つまらなく嫉やかれるのも嫌だから言つてしまおう、長者町の道庵ひょうきんという剽軽ひょうきんなお医者さんへ預けることにしてしまつたんだ」

「長者町の道庵さん？」

こう言つて男女が山下の銀床ぎんどこという床屋へ入るのまで、お絹はちゃんと見届けてしまいました。

根岸すまいの住居へ帰つてからお絹は、異様の嫉ねたましきで悩まされました。惚れてもいない男だが、ああなつてみると、なんだか仕返しをしてやらなければ納まらなくなりました。

と言つて、自分が男をこしらえて見せつけてやるほどのことではない。なんとかして、いつたん自分の方に向いていた男の

心を、もう一ぺん向き直させなければ女の面目が立たないように思いました。一緒に歩いていた女は、ありや女房だろうか妾だろうか、よけいな詮索せんさくまでしてみたくありません。いったいあの男が、徳間とくまの山の中で抛ほうり放しにして置かれてあつたのを助かつて出て来たのが不思議、誰が助けて来たのだろうか、これによつたら山の中へあの女が通りかかつて介抱した、それからの腐れ縁じゃないか知らななども考えてみました。それはそれにしてもあの女……

「ああ、そうだ」

とうとう思い当つてお絹は小膝こひざを丁と打ちました。あの女はたしか忠作のところへ金を借りに来たことのある女である。そうだそうだ、甲州へ旅興行に出る仕込みのためといって、五十両の融通を人の中に立てて借りて行つたのはあの女に違いない。

そんならばことによると、自分が持つて来た品物の中に、あの書付が残っているかも知れぬ。お絹は葛籠つづらをあけて証文箱を取り出しました。

忠作と別れる前から、お絹は末の見込みのないことを知つて、自分の物は廻しておきました。大切の証文も幾通りか逸早いちはやく取纏とりまとめて持つて出ました。

「有つた有つた、これに違いない」

と皺しわをのぼした一通の証文は、一金五十両也と書いて、女軽業太夫元かくという名前にしてあつたから、それである女が軽業師の興行人であり、その名をかく、ということまでお絹は知ることができました。こうなつてみると、お絹はそれやこれやを種に、二人をいじめつけてやらなければ納まりません。

その晩は寝ながらも、この仕組みのことばかり考えていまし

た。

先刻、耳に入れた話、何か預かり物の一件、生娘きむすめだとかお邸奉公だとか言っていたが、あれは何、それを種に使えまいか。そうして店へ入る時に言ったのは、長者町の道庵ひょうきんという剽軽な医者へ預けることにしたという言葉。

「よしよし、道庵が入るならば芝居はが栄える」

その翌日、お絹は十二分の好奇心を以て長者町の道庵先生を訪れました。

「先生、今日伺ったのはほかのことではございませんが、先生の身の上うわさにありそうもない噂うわさを聞きましたから、それで念のためにお聞き申しに上りました」

「ははあ、モウあれを聞かれましたか、それはそれは」と言つて、道庵はきまりの悪いような面かおをします。

「先生にもお似合いなさらぬことで……」

と、お絹はなんだか意味のありそうに言うつと、道庵は恐縮して、「ツイどうも、あんなことになつてしまつて甚だ申しわけがない、わしも面白半分で出かけて行つて見ると、ワイワイ騒いでお粥かゆを食つている様子があんまりいいもんだから、ツイ大八車の上へ乗つかつてよけいなことを喋しゃべつてしまつと、みんながまた馬鹿に嬉しがつて、やんややんやと讚ほめるから少しばかり調子に乗つてしまつてるうちに、騒さわぎがだんだん大きくなるので、こいつはたまらねえと、逃げ出すのも面倒だから車の上へグウグウ寝込んでしまつたようなわけで。それをどう間違えたか道庵おだが煽おだつたのだ、貧窮組を持ち上げたのは道庵の仕業しわざだ、それでお前の家を荒したのも道庵が指図をしたんだなんて、よけいなことを言い触らす奴があつたものだから、危なくお上の手に

かかつてこの腕が後ろへ廻るところを、それでも永年、道庵で売り込んであるだけに、役人の方で取り上げずに、道庵か、道庵ならば道庵でよろしい、テナことになつて無罪放免で済んだが、年甲斐もなくばかなことをしたものだよ、全く以て申しわけがない」

「先生、そんなことではありません、わたしの聞いた噂というのは別なことですよ」

「はて、そのほかには、別に人に聞かれて後暗えうしろぐれようなことをした覚えはねえのだが」

「先生が奥様をお迎え申すようになったと聞いて、お祝いに参りました」

「おやおや、わしが奥様を迎えることになつたつて？ そりや初耳だ。そうしてそりや、どこから来るんだい」

「先生、恍惚とぼちやいけません、それだからワザワザお聞き申しに来たのですよ」

「そりゃ、おれの方からもお聞き申したいところだ、ほかのことと違ってこんなめでたいことはない、どこから、どんなのが来るんだか早く聞かせてもらいたい」

「先生が言わなければ、わたしの方で言ってみましょうか」

「ぜひ、そういうことにしてもらいたい、同じ値ならば若くつて綺麗きれな方にしてもらいたいが、こう年をとつて飲んだくれの俺俺だから、とてもそんな贅ぜい沢たくなことは言えねえ、万事お前さんの方に任せる」

「ところが、若くつて綺麗なのだから不思議です、その上にお邸奉公までつとめて、遊芸たしなの嗜たしなみもあれば礼儀作法も心得ているというのだから、どうしたつてこれは先生に奢おごらせなければ

「ばなりません」

「奢る！ そうなれば道庵もこうして踏み倒されてばかりはいねえ。そうしてなにかい、親許おやもとはいつたいでこで、いつ来てくれるんだらう」

「親許は上野の山下で、もう結納ゆいのうのとりかわせも済んで、近々のうちにお輿こしい入れがあるそうじゃありませんか」

「親許は上野の山下だつて？ そうしてそれは武家か町人か、ただしまだ慈姑くわいなかま仲間が親許か、その辺も確かめておきたい」

「山下の銀床という床屋が親許で、近いうちに道庵先生のお邸へ乗組むということを、人の噂でチラリと聞きました」

「ハハア、なるほど」

それと聞いて道庵先生が初めて気がつきました。この女どこから聞き出して来たか、もうあの娘のことを知っている、そう

してワザとこんなふうあやに綾をかけて持ち出したのだなと思ひました。

それと共に道庵がフト考えついたのは、この女もずいぶん腑ふに落ちないところはあられるけれども、立入って人の世話をしてみたがったり、ぞんがい人を調から戯かつてみたりするところに、いくらか道庵と共通のところがあつて心安くしているから、女は女同士で、いつそ、この女に頼んだらどうだろうか、道庵は道庵なりに見当をつけた事件がありました。

「ははあ、あの娘のことか。どこから聞いて来たか知らねえが、お前さんにそう言われると、ははあなるほどというほかはないのだ。実は俺もその用談を持ちかけられて始末に困つたようなわけだが、いかがでございませう、お前さんの方でなんとかお考えがございませうか」

道庵はこう言つてお絹に相談を持ちかけてみると、お絹は二つ返事でその娘を預かろうと言ひ出しました。

道庵はそれでホツと息をついて、お絹を信用して百蔵から頼まれた娘をそつくりその方へ廻すことにしてしまいました。

娘を預けようとする道庵も無論、その娘がお松であるとは知らず、それを預かろうとするお絹ももとより、それはいつたん自分の手塩にかけたお松であろうとは思ひも及ばず、道庵は頼まれてみたものの小面倒であるから、そのままお絹に引渡そうとし、お絹はただ、がんりきとお角の間に何か仕返しをしてやろうという、いたずら心で進んでそれを引取ろうと言ひ出したものです。

こう話が纏まとまつて、お絹が道庵宅を辞して出ようとする時に、玄関で、

「御免下さいまし」

やくろうもち

葉籠持の国公がその応接に出てみると、

「山下の銀床から参りました……」

その声は聞覚えのある声、すなわちが、んり、きの百蔵の声でした。

道庵は自身で玄関へ立ち出でて見ると、そこに駕籠を釣らせて来たのは、銀床の亭主、まごう方かたなきもとのが、んり、きの百蔵で、

「これは先生、かねてお願い申したのをただいま連れて参りました、なにぶんよろしく」

次の間で隙見すきみをしていたお絹が、

「おや！」

と言つて驚いたのは、手を取つて駕籠から助け出したそれは、

自分が手塩にかけてお松の姿であつたからであります。

次の間で隙見をしていたお絹が驚いたばかりでなく、迎えに出た道庵もまた驚きました。お松にとつては道庵は再生の恩人であり、伊勢参りをした時に大湊おおみなとで会つて奇遇を喜んだこともありました。これはこれと言つて道庵もお松も直ぐ打解けた。事情を聞いて、連れて来たが、んりきも喜んで、なおいろいろとお頼み申した上に無事に帰つてしまいました。

「お松ではないか」

お松はその声を聞いて、水をかけられたような心持がしました。そこに立っているのは、姿こそ今は丸髻まるまげの奥様風になつているが、もと自分を仕立ててくれたともかくも恩人でありましたから、

「まあ、お師匠さん」

頓とみには二の句がつけませんでした。

「珍しいところで会ったね」

「どうも御無沙汰ごぶさたを致して済みませぬ」

「見ればお前はどこぞお邸奉公でもしておいでのようなだが、どこに勤めていました」

「はい、三田の蜂須賀様のお邸に」

「どうしてお前、あの神尾様のお邸を出てしまったの」

「つい、よんどころないことが出来まして、それ故まことに……」

「人もあろうに、風呂番の与太郎とやらいう足りない男と逃げたというじゃないか」

「どうも申しわけがありません」

「お前があんな不始末をしてくれたおかげで、わたしは殿様の前へ、どんなに辛いつら思いをしたか知れやしない。ほんとに考え

なしたことをしてくれたね」

「何卒おゆるし下さいまし」

「出来てしまったことは仕方がないが、もうその与太郎という風呂番とは手が切れてしまったのかい」

お絹が与太郎与太郎というのは与八のことですけれど、お絹の口ぶりによれば、お松と与八と逃げたのは不義をして逃げたもの、お松がその風呂番にそその喉かされて逃げたものと思ひ込んでゐるらしいから、お松は、

「あの人が、よく親切にしてくれましたけれど、わたしがかみがた上方へやられたものですから……」

「何が親切なんだろう、色恋にも名聞みやうもんというものがあるのに、風呂番と逃げたんでは話にもなにもなりやしない。ほんとうにわたしは、あの時ぐらい情けなく思つたことはありません」

「そういうわけではございませんぬ」

「それからお前、上方へも行つていたそうな。一度ぐらいわたしのところへ便りをしてくれてもよかりそうなもの」

「そのつもりでおりまして、つい、いろいろの目に遭つたものでございますから」

「こつちへ来てそんなに御奉公するまでに、なぜわたしを訪ねてくれなかつたの」

「まだこつちへ参りまして僅かでございますから、ツイ御無沙汰を」

お松は畳みかけて叱られるのを苦しい受^{うけ}太^{だち}刀をしていたが、お絹はあんまり深く追及しないで、

「過ぎ去つたことは仕方がないから、これから心を入れかえて下さい。今お前をつれて来た人なんぞも、どうやら性質^たのよ^ち

人ではない様子、引受けたのが当家の道庵さんや、わたしたちだからよかつたけれど、一つ間違えば、お前の身は台なし。ほんとうに危ないところ」

お絹は自分の子を危ないところから助け出したような言葉で言っていますが、これはまるきり作り言つくごとではなく、多少の親身しんみが籠っているようです。

十一

こうして道庵の手からお松は再びお絹の許へうつることになりました。お絹は以前のことを一通り叱言こごとを言ってみたりしたけれど、お松の詫び方があまり神妙でしたからお絹も和やわらいで、「お前がそういう気になってくれれば、わたしだって昔のこと

なんぞを繰返すではありません」

「お師匠様、それについては一つのお願いがございしますが、どうかお聞入れなすつていただきとうございます」

「改まつてお願いというのは、どんなことでしよう、言つてごらん」

「お暇いとまじ乞いを致さずにお邸を出ましたのは、わたしの重い罪でございしますから、何卒もう一ぺん、神尾の殿様へ御奉公にお出下さいまし、そうして一生懸命に御奉公を仕直して、お師匠様の御恩報じを致したいと存じまする」

「なるほど」

お絹は本気になつてなるほどと言いました。それはお松の心があんまり正直だから、多少動かされたのであります。

「けれどもね」

ややしばらく感心していたお絹は、けれどもという言葉を挿はさんでこう言いました。

「お前はまだ知るまいが、神尾様も昔の神尾様ではないのだよ、今はお江戸にはおいでにならないのですよ」

「あの、甲府の方へお役替えになったそうでございますね」

「まあ、よく知っている……」

お絹の眼には驚きの色がありました。

「甲府のような山の中へおいでになりましたは、何かにつけて御不自由でございましょうから、できますならば、お傍そばにいて相当の御用を勤めてお上げ申したいと存じまする」

前にはいやがって逃げ出した神尾の殿様のところへ、今度は進んで行こうと言いだしたのは、それだけ苦勞をして来たききめだろうと思いました。

「ほんとにお前は感心なところへ気がつきました。それは甲府詰といえはお旗本の運の尽きで、ああして我儘わがままをしておいでなすつただけに、今はどんなに苦勞をしておいでなさるか、それを思えば、おいとしくてなりませぬ。お前がそう言ってくれるのが、わたしにとっては親身しんみのように嬉しい。御威勢のよい時は、ずいぶん忠義を尽す人も多かつたのに、今は江戸からお紙を差上げる人もない御様子、それをお前が、自分から御奉公に上ろうと言ってくれる心が嬉しい」

お絹は喜びました。お松はなにも元の殿様に忠義を尽す心から言つたのではなかつたけれど、お絹はお松の初心うぶな気性を、ただ律義りちぎ一遍いっぺんにのみ受取つたから親身に嬉しく思つたのでした。そういうふうにしてすべて善意に受取られることは、お松の性質の一徳でありましたけれど、お絹もまたこのごろでは、物に感じ易く

なつてしまったのです。さほどでもないことを嫉ねたましく思つたり、その仕返しの種と思つて、はからずお松と逢つてみれば、その言うことのしおらしさにいちいち感心してしまうようになつたのは、ついこのごろのことでありました。

「わたしはもうこれまでの体だから、これからお前を養女にして、町人でいいから堅そうな養子を見立てて、小店こだなの一軒も出すようにして、お前の世話になつて畳の上で死ぬるようになりたい」

なんぞと、心細いことをも言い出すのであります。今夜もまた二人は床を並べて寝しんに就きましたが、

「お師匠様、まだお手形は出ませんのでございませうか」
お絹は思い出したように、

「ああ、もう下さがりそうなものですよ。けれどもお前も知つての

通り、女の手形というものはなかなか手続が面倒なのだから、それでこんな延びるのでしよう。もしあんまり後おくれるようならば、わたしがまた頼み込んでみるところがあるから、もう二三日待つてごらんさい」

「もし、お手形が下りませんでしたらば、わたしはお手形なしで、裏道を通つても、早く甲府へ参りたいと存じます」

「わたしの方はそうはゆかないから、まあもう少し待つておいで」

お絹とお松との手形というのは、疑いもなく、甲府へ行こうとするその道筋のお関所へ見せる女手形おんたてがたのことであります。それを願ひ出しておいて、まだ下さがらないから二人でこんな噂をしているのです。

その翌朝になると女中が、

「旦那様、お客様でございます、山下の床屋からと申しました」と聞いて、お絹はそれと気がつきました。

「まあ、お待ち、どんな人が来たか見てやりましょう」

お絹はワザワザ自身に立って玄関の襖ふすまの隙から表を見ると、先日の夕方、がんりきの百蔵と睦むつまじそうに山下の雁鍋がんなべから出て来たお角でありましたから、また居間へ帰って、わざととりすまして、

「何の御用ですか聞いてごらん、お門かどちが違いではございませんかと尋ねてごらん」

それで女中が出て行きましたが、暫くたつてまた引返し、

「旦那様へ、このお手紙をお目にかけてさえすればわかるからと申しました、お客様は女の方でございます」

一封の手紙を取次いだからお絹はそれを取って見ると、長者

町の道庵先生からであります。

封を切つて読んでみると、その文面は、かねてお預け申してあつた娘を、この手紙を持った人が迎えに行くから渡してやってくれ、お礼には後で拙者が出るからということでありました。まさしく道庵先生の筆に違いないけれど、お絹はわざとらしく解げせないような顔をして、クルクルと巻いてしまい、それを女中に突き返すようにして、

「どうも、お手紙の筋は手前共の主人にはよくわかり兼ねますから、お返事の致し様がございませんとそう言つて、この手紙を返してやつてごらん」

「かしこ畏まりました」

女中はまた出て行きました。なんと言つて来るか知らんとお絹は、煙草の煙を吹いておりました。

「旦那様」

またまた取次の女中がやって来ました。

「帰ったかい」

「いいえ、お客様は、そんなはずがないと申しております、とにかく御主人様にお目にかかった上で、お門かど違ちがいならお門違ちがいのようにお詫びを致しますからと言つて動きませぬのでございます」

「そうだろうと思つた。それではお通し申して置き。それから、ようだんす用ひき箆だし筒だしの抽斗ひきだしの二番目のをそっくり引き出してここへ持つて来て下さい」

女中はまず、命ぜられた通りに用箆筒の抽斗をそっくり引抜いて、お絹の前へ持つて来てからまた取次に出かけました。

お絹はその抽斗の中えを選びわ分けて一枚の借用証文を引き出し

ました。この証文は、お角が甲府へ旅興行に行く前に、仕込金として、忠作から借りて行った金の証文であります。

「お松や」

お絹は証文の皺しわを伸ばしながらお松を呼びました。

「はい」

「わたしが今お客様と話をしていますから、もしお茶をと言つた時分に、お前はお茶を入れて持って来て下さい。お客様は、お前の面かおを見ると何か言い出すかも知れないが、お前は心配しないで、お茶を出したらば直ぐに奥へ入っておしまい」

こう言つてお絹はとりすまして客間へ立つて行きました。

「お初はつにお目にかかりまして」

お絹とお角と両女ふたりの挨拶あいさつがあつてから、お角が改めて、

「さきほどお目にかけましたお手紙、どうやらお門違いとも思われませんが、御様子がおわかりにならないそうでございましたから、押してお目通りをお願い申しました」

「道庵さんは始しよつちゆうこんい終懇意に致しておりますけれど、あの娘さんがどうしたことやら、文面が何のことやら、のみこめませんものですから」

「あの道庵先生から、当家様へ二三日お預かりを願いました娘さんのことでございますが、その親許おやもとが今日見えまして、連れて帰りたいということでございますから、さつそく道庵先生へお話を致しますると、先生は当家様へお頼み申してあるとおっしゃって、おれが直じきに連れて来てやると御自身でお出かけになるところを、なにしろあの通り御酒ごしゆを召していらしって、お足元がお危のうございますから、それには及びませぬ、お手紙で

もいただきますれば、私共の方からお迎えに上りますからと申しますと先生が、よしよしとおっしゃって書いて下すつたのがあのお手紙でございます」

「それは変なことでございますね、私共では、先生から娘さんとやらを預かつたような覚えは一向にありませんのですが」

「おやおや、それでは道庵先生が何か勘違いをなすつたのではございませんまいか」

「あの先生のことだから、何かいたずらをしてお前さんたちをかついだのかも知れませんが」

「ほかのことと違ひまして人一人のことでございますから、そんな罪ないたずらをなさる先生でもございますまいし」

「なにしろ、わたくしどもでは、道庵先生から小猫一匹でもお預かり申した覚えはございませんから」

「それは困ったことになりました、あの先生に限って、酔っぱらっておいでになつても、信用の置けることには置ける先生だとばかり思つて安心して上りましたのに」

「どうもお気の毒に存じます、もう一度先生の方を確かめてごらんなさいませ」

「そういうことに致しましょう。これはどうも飛んだ失礼を致しました、そそつかしいことでお恥かしうございます、幾重いくえにもお許し下さいまし」

お角は当惑してしまつたから、お絹に向つて自分のそそうを詫びました。

「まあよろしうございます、お茶を一つ召上れ」

お絹がお茶を一つと言つた時に、何も知らないお松はお茶を

立ててこの場へ持つて出ました。お角は今お詫びをして帰ろうとするところへお松が入つて来たものだから、思わずその面かおをじつと見て、

「おや、このお娘さんは……」

お角が驚いて膝を立て直すのを見て、お絹は莞爾にっこりと笑いました。

お松は何のことだかわかりませんが、ただこの女のお客が自分をぎょうぎょう見て仰々しい表情をしたことを、少しくおかしく思いながら、

「おいであそばせ」

一札をして出て行くこうとする時、お角の言葉つきがガラリと変つて、

「奥様、おからかいなすつてはいけませんよ、女のことでござ

いますから怯おびえますよ」

膝を立て直したお角の挙動を、ますます怪しいことに思いながらお松はお茶を出して、次の間へ立去つてしまいました。それを流し目でお角は見送りながら、

「奥様、お前様は、女の子はおろか、猫一匹も道庵先生からお預かり申した覚えはないとおつしやいましたね。そんなことだろうと思いました。危ないこと、子供の使いで追い返されて、こつちからは赤い舌を出され、向うでは笑ひ物にされるところでしたよ」

お角は坐り込んで、ことわりもなしにお絹の煙管きせるを借りて煙草を一ぷくつけた時に、お絹はさいぜんの証文を取り出しました。

「お前さんには、あの女の子より先にお預かり申した品がある

から、それをお返し申してからの話にしようと思ひました」

お絹はその証文をお角の前に置くと、お角は不審な面かおをして煙管を投げ出し、証文を取り上げて披ひらいて見ました。

「おやおや、こんな品物が奥様の方に廻まわつていようとは存じませんでした。エエよろしうございますとも、お借り申したものは決してお借り申さないと申しません。甲府へ行く前にこの証文通りお借り申しました。甲府から帰つて参りますと、佐久間町の方へお返しに上つたんですけれど、お家が壊こわれておいでなすつて、どこへお引越しなすつたか近所で聞いてもわかりませんから、ツイそれなりになつてしまつたんですよ。決して返さないつもりじゃございません、お借り申したものはお借り申したもので、それをこうして不意にわたしの鼻先へ突きつけて下さるなんぞは御念いが入り過ぎましたね、あんまり御念が入つて

御親切が有難過ぎるから、わたしの方でも少々御念を入れてから返して上げることに致しましょうよ」

「ええ、いつでもようございますよ、このお預かりの方はいつでもかえして上げますが、あの娘の方は何べん取りにおいでなすつても無駄道でございますから、その方はお断わり申しておきますよ」

「おや、それはどういうわけでございますでしょう。なるほどこの証文は口を利きますけれど、あの娘さんはありや山下の床屋から、道庵先生のお手を通して当家様へお預け申した人、いくら高利貸が御商売でも、誘拐かどわかしまでなさるんじゃないやございますまいね」

「気をつけて口をおききなさい、誘拐とはそりや何のことです」
「誘拐が悪うございましたか、人の娘を預かりながら、それを親許から受取りに来れば、預からないの返せないのと、しらを

切るのはそりや誘拐じゃありませんか」

「いくら淋しい根岸でも近所がありますから、あたりまえの声で話をして下さいよ。お前さんは何も知らずに山下の床屋から尋ねておいでなすつたようだが、あの床屋というのはいったい、この娘の何に当るのですね。親許から迎えに迎えにとおつしやるが、その親許というのはどんな人なんだか、それがお聞き申したいね」

「その親許というのは銀床の亭主の友達なんですよ、その人がいま銀床に来ているんだから、それより確かなことはございませぬよ」

「銀床の御亭主というのは、どんな人だかお前さんは御承知ですか」

「そりや銀さんといって、片腕がないけれど、腕がいいのであ

の辺で評判ですな」

「その銀さんとやらが、どうして片腕が無いんだか知っていますか」

「大きにお世話さまですね、片腕があらうとあるまいと、好い人は好い人なんですからね」

「ところが、あんまり好くない人なんですよ。なるほどお前さんには片腕のないところがいいかも知れないが、あんな物騒な人に娘盛りの子を預けてはおけません」

「何が物騒なんでしょう、人には親切で、ぜにかね銭金の切れつばなれ

はよし、男つぶりだつて、まんざらじゃありませんからね。若いとき喧嘩をして、腕に怪我をしてから切り落すようになったんだから、いくさじん軍人の向う傷と同じで、男にとつてはみょうもん名聞なくらいなものですよ、わたしはあの片腕が大好きなのさ」

「おやおや、首の無い殿御を抱いて寝るといってお姫様もあるんだから、片腕のないところもまた乙おっでしようけれど、あの男が片腕をなくしたわけを聞いてしまったらお前さん、三年の恋も冷さめるでしょう。何も知らないで、あんな男に頼まれておいでなすつたお前さんがお気の毒」

「そんなことを聞きに上つたんじゃないやありません、あの人の片腕がどうしようと、そんなことは大きなお世話じゃありませんか」

お角は非常に腹を立てました。自分に恥たをかかせようと企たくんでするらしいこの女の仕打ちが憎にくらしくてたまらなくなりまして。こうなつては腕うでづくでも、お松を連れて帰らねば承知ができなくなつたから、

「何を言つてやがるんだい、誘かど拐わめ、ぐずぐず言わずに娘をお出しよ、出さないとためにならないよ」

こう言つて太返ふてかえりました。近所隣りへ聞えるような大きな声で罵ののりました。

「いいえ、かえすことはできません。何ですお前さん、人の家へ来て失礼な、そのなりは。さあ早く帰つて下さい、お帰りなさい」

お絹も負けてはいませんでした。

「失礼は持前もちまえですからね、とてもお前さんのようにお上品な面かおをして、人の娘を誘拐かどわかすようなことはできませんよ。わたしに失礼な真似をしてもらいたくなければ娘をお出し、大きな声をされるのがいやだと思つたら、預けておいたお嬢さんを出しておしまい、ぐずぐず言つてると腕うでずくだよ、わたしはお前さんに噛かりつくよ」

「勝手になさい。わたしの体に指でも差してごらん、わたしも

ただは置かないが、この近所には、わたしの知合いで、公方様くぼうさまの兵隊を指図をする重い役人もいるんだから、お前さんのためになりませんよ」

「面白いね、御家人がいたら出てもらおうじゃありませんか、公方様の兵隊を指図なさるお役人がおいでなすつたら、その兵隊を繰出してもらおうじゃありませんか、筋道を立ててお嬢さんを受取りに来る人と、企たくみをして誘拐かどわかしをしようという人と、どちらが白いか黒いか、そういうお方に見てもらおうじゃありませんか」

「お前さんのような下品な人とは口を利くのもいや、勝手にひとりで喋しゃべっておいで」

お絹は座を立って次の間へ行つてしまおうとする。お角は嚇かつと怒りました。

「下品で悪かったね、どうせわたしなんぞは、下品で失礼で阿婆摺あばずれでおたんちんですから、自棄やけになつたら何をするか知れたものじゃありませんよ」

お絹の後ろから飛びついて引き戻そうとしました。

「何をするんです」

お絹はそれを突き返しました。

「さあ娘を返せ、お嬢さんをこれへお出しなさい」

お角は突き放されてまた武者振りむしやぶつく、それをお絹は突き返す。

「まあ、何をなさるんでございます、何卒どうぞお静かに、お師匠様もお静かに、おかみさんも手荒いことをなさらずに」

次の間にいたお松は、見兼ねてそこへ仲裁に入りました。

「おお、お嬢さん、わたしは銀床から頼まれてお前さんを迎え

に來たんですよ、お前さんの伯父さんがいま甲州の方から帰つて、お前さんを連れて帰りたいというから、わたしが道庵さんまで迎えに行くと、こつちへ上つているといふから、わざわざここまで来てみるとこの人が妙な真似をするから、わたしは腕ずくでもお前さんをお連れ申すつもりなんでございます、さあ、こないやなところにおいでなさらずに、わたしと一緒にお帰りなさいまし」

お角は仲裁に出たお松の手を引張りました。お絹はその間へ割つて入り、

「お前さん方のような悪者の仲間へ、この子を渡すことはなりません」

「おや、悪者の仲間とはよく言った」

お角はいよいよ荒あばれます。お絹は少しもひるみません。お松

がもてあましているところへ折よく、

「まあ、まあ、まあ」

かねて様子を見ていたもののように飛び込んで来たのは七兵衛でありました。

十二

七兵衛のこの場へ飛び込んだことは、すべてにおいて都合がよくなりました。

二人の女をうまく仲裁して、話をそっくりわかるようにしてお角をなだめて帰し、そのあとでお絹と万事話し合つて事情がわかり、話を纏めておいて七兵衛は山下の銀床へ帰りました。

「百、いま帰つた」

「兄貴、帰ったのか、俺がいま出かけようと思つていたところだ」

「どこへ」

「根岸の後家ごけさんとやらがおかしな真似をするというから、行つて見ようと思つていたところなんだ」

「それなら、もう話が纏まとまったからよせ」

「兄貴の方は話が纏まとまったか知れねえが、俺の腹にはちつとばかり居ねえことがあるんだ」

「あれはあの女の癖だから、別に気になさんな」

「癖にしてはあんまり性質たちがよくねえようだ、何かこつちに恨みがあつてするようおつな乙おつな真似をしやあがる」

「ははは、恨みは大ありだ、当つてみれば因縁いんねんがちやんと附いてる」

「いつたい、その女というのは何者だい」

「お前がその女に悪戯いたずらをされるのは、されるような因縁がついているんだから仕方がねえ、ちよつと調戯からかいにやつてみたんだから、根に持つなよ」

「そう聞いてみると、なおさら打捨うつちやつちやおけねえ」

「出かけて行つてどうするつもりだ、その女に指でも差してもらうと俺が困ることになるんだから、打捨つておいてくれ」

「兄貴の迷惑になるようじゃあ済まねえが、なんだか様子がわからねえから、まあ一通りの話を話してみてくれ」

「根岸にいる女というのはそりやあそれ、徳間峠とくまとうげの一件物だ」

「ナニ、徳間峠の？ まさかあの切髪の新造しんぞじゃあるめえな」

「それだそれだ、お前が腕を一本とられた因縁物だ」

「なるほど、そいつは廻めぐり合せが奇妙だ、その女なら因縁はこつ

ちから附けてやらにやあならねえ」

「ところが向うから因縁をつけて来たというのは百、お前が氣が多いからだ、あの女軽業の親方とお前と出来て、嬉しそうに歩いて見せつけられたから嫉やけてたまらねえので、そんな悪戯いたずらをして腹癒はらいせを試みたんだ、早く言えば百、お前が色男すぎるから調戯からかわれたんだ、ここは腹を立てねえで一杯奢おごるところだよ」

「うむ、そう言われるとなんだか擦くすくつてえような氣持もするが、浮気で言うんじゃあねえ、あの女はあんまり薄情すぎる」

「ははは」

七兵衛は笑っているが、が、ん、り、き、は、ま、だ、心、の、底、に、何、か、残、つ、て、い、る、ら、し、い。

「兄貴の前だが、おれは一旦ものにしかけた女を、そのままに

しておくのはいやだ」

「おやおや、お前はまだそんなことを言ってるのか、男らしくもねえ、まだ未練が残っていたのかい」

「未練というわけじゃあねえが、おれもあの女ゆえにこの腕を一本なくして、生れもつかねえ片輪かたわにされちまつたんだ、身から出た錆さびだと言えばそれまでだが、どうもこのままじゃあ済まされねえ」

「済まされなけりやあどうするつもりだ、腕一本で済んだのが見つけもので、すんでに命のねえところを助かったんだ、よけいなチョツカイを出したおつりと思えば腕一本は安いもんだと諦あきらめていたくせに、今になって済まされねえとはどうするつもりだ」

「兄貴、あきらめというのは見ず聞かずの上のことだ、ツイ目

と鼻の先にいて、こんな悪戯をされた日にやあ、どうもが、んり、きも眼がつぶり切れねえ」

「存外、手前も男がケチだ、向うはちよつと調戯つただけの御挨拶で、女というやつは、ああもしてみないとバツが悪いんだ。

可愛いくらいのもんじゃねえか」

「そこが兄貴と俺との性根しょうねが違うところなんだ、ケチな野郎ならケチな野郎でいいから、俺は俺の思うようにしてみてえ」

「それじゃなにか、執念深くどこまでもあの女を付け廻そうと言うんだな」

「そうだ、みんなごと、俺はこの片腕であの女をこつちのものにして見せる、兄貴の方に何か差合さしあいがあるかは知らねえが、お前も苦労人だから一番おれの男を立てさせてくれ」

「百、お前がそういう心がけならそれでいいから思うようにやつ

てみる、その代り、あまり出過ぎると、ちいーつと危ねえことがあるから、そう思え」

「合点だ、がってんどのみち危ねえ橋は渡りつけてるんだから、地道をじみち歩くのがばかばかしいくらいなもんだ」

「うむそうか。それじゃあ、あの女は近いうちに娘をつれて甲州街道を上つて甲府へ行くはずだから、手前も一緒に行つてみたらよかろう、その途中には手前が望む危ねえ橋がいくつもあるんだから、渡れるものなら渡つてみねえ」

「兄貴、お前もついて行くんだらう」

「俺が頼んで行つてもらおうような仕事だから、道中は眼がはなされねえ」

「そうなると兄貴と俺と楯をたて突くようなもんだな、兄貴を向うに廻して、俺が色悪いろあくを買つて出るようなものだ」

「まあ、いいようにしてみろ」

七兵衛とが、んりきとはこんな問答をして、少しばかりおたがいに気まずい色を見せて、七兵衛はこの銀床を立ち出でました。「困った野郎だ、何をしようとしたかの知れたようなものだが、詰らねえことにしたくもねえ、なんとかしてあいつを追っ払ってしまうような工夫はねえものか」

七兵衛は考えながら歩きましたが、

「そうだそうだ、女から持ち上ったことは女に限る、一番あ的女軽業のお角という女を焚たきつ付けて嫉やかしてやろう、そうしてが、んりきの胸倉むなぐらを取捉とつつかまえて、やいのやいのをきめさして、動きの取れねえようにしておけば、こつちも道中よけいな心配がなくつていい、こいつはいいところへ気がついた。あの女のいるところは両国の小屋ですぐわかるだろう、これから行って、罪

なようだが狂言を書いてみる、いやはや、あつちでもこつちでも野呂松^{のろま}人形^{あやつ}を操るような真似ばかり、おれも釣り込まれていいかげんの狂言師になつたわい」

十三

宇治山田の米友はこの頃、お君の身の上を心配しています。両国の木賃宿^{きちんやど}で別れてから時々便りのあるはずなのが更にありません。自分は程遠からぬ箱惣^{はこそう}の家に留守番をしていることだから、毎日のように宿まで通^{かよ}つてお君の便りを聞こうとするが、さつぱり何とも言つてよこしません。

ああいうわけで米友は、両国の見世物小屋を追い出されてから、両国の近辺へは立廻れないわけなのですが、こつそりと出

入りをして、もしお君らしい人が通りはしないかと思つてキョロキョロ見ていましたが、一向それらしい女の子は見えないから、いつでも失望して帰ります。米友の身体は小兵な上に背が低いことは申すまでもありませんが、肉附だとして尋常の人よりは少し痩せているくらいですから、夜なんぞは誰でもみんな子供だと思つています。米友が一人で留守番をしていると近所の子供が寄つて来て、

「お前も一緒に遊ばないか」

と言いましたが、

「やあ、この人は子供じゃあねえんだ、大人だよ、おじさんだよ」

それで近所の子供らは、米友をおじさんと言うようになりました。

「おじさんは槍が上手なんだね」

と言つて槍をいじくる。

「そりや上手さ、この間は侍の泥棒が十人も来たんだけど、おじさんがこの槍一本で追払つたんだ、ねえおじさん」

「おじさんは背せいが低いねえ、俺おいらと同じぐらいだねえ、どうしてそんなに低いんだろう」

「そりやお前、生れつきだから仕方がないじゃないか。背が低くつたつてお前、おじさんの面かおをごらん、皺しわが寄つてるじゃないか、だから年をとつてるんだよ」

「それにおじさんは跛足びっこだねえ、どうして跛足になつたの、馬に蹴られたんじゃないの」

子供は正直だから、寄つてたかつて米友の身体からだの棚卸たなおろしをしてしまいます。米友もさすがに苦い顔をしています、子供の

ことだから笑っているよりほかはないのを、子供はいい気になつて米友の背中へ乗つかかつたり、膝を枕にしたりして、

「びっこ跛足だつて槍は使えるんだよ。ほらこのあいだ両国へ来た印度人の黒ん坊をごらん、あの黒ん坊も跛足だろう、それでも槍を使わせるとすてき素敵だつたぜ。金ちゃん、お前あの黒ん坊を見たかい」

「見なかつたよ」

「話せねえな、印度で虎を退治して来た黒ん坊なんだよ、俺らはお父さんにつれて行つてもらつたんだ、ずいぶんこわ怖い槍の使い方をして見せたよ」

米友は、いよいよ苦い面かおをしていると、子供は頓着とんちやくなしに、「それがお前、途中でふいといなくなつちまつたから、もう一ぺん見に行くつもりだつたけれど詰らねえや。でもこのごろ、ま

た朝鮮から象使いが来るんだとき」

「どこへかかるんだい」

「前に印度人の槍使いが出たあの軽業の小屋さ、娘軽業というのがあつたらう、あれが朝鮮まで行って帰つて来たんだとき、それで朝鮮から象使いをつれて来て、来月からあすこへかかるんだつて。だから俺らはまたお父さんにつれて行ってもらうんだ」

「俺らもつれて行つてもらおうや」

子供たちのこんな話を米友がききとが聞咎めました。

「子供衆」

「何だ、おじさん」

「朝鮮から象使いが来るというのは、あの、なにかい、もと女軽業や力持がいたあの見世物小屋かい」

「そうだよ、もうビラが方々へ廻っているよ」

「それで、もとあの小屋にいた軽業や力持も帰って来たのかい」

「みんな帰って来たよ、ひさびさ久々にてお目見え、お馴染なじみの一座、な

んて書いてあるよ」

「そうか」

米友は腕を組んで考え込みました。甲府へ旅興行に出かけたにしてはかなり日数がかかっていたが、ついでに処々の旅興行をして帰って来たものだろう。帰って来たとすれば、何よりも先にお君からの便りがなければならぬ。友さんいま帰ったよ、と言ってお君が真先にこの米友を尋ねなければならぬのだ。つづいてムク犬も尾を振って咽喉のどを鳴らして跟ついて来なければならぬはずなのだ。それにもうビラも出来て諸方へ廻つているといふのに、自分のところへ音沙汰おとさたがない。お君はこの米友

を忘れてしまったのか、あんな仲間へ入っているうちに気象がきしよう変つて、俺らのことなんぞはどうでもいいことにしてしまつたんじやあるまいか、どうも訝おかしい。米友は単純な頭をいろいろに捻ひねつてみたけれど結局、米友の知恵ではどうしてもその間の消息がわからないから、これは直じかに行つて掛合つてみるよりほかはないと思案を固めました。

しかしながら米友には、あの小屋へ行けないわけがある。見世物小屋の掟おきてで、あんなことをしてブチ壊しをやつた芸人は、見世物師の背後なからずものについている破落戸が寄つてたかつて手酷てひどい制裁を加えて追い出すのであつたが、米友のは全く無邪氣でやつた失策しくじりであり、且つ槍の名人ときているから、荒つぽいことをせずせに単に追放だけで済みました。それを今ノソノソとあの小屋の附近へ近寄ろうものなら、どんな目に遭あうか知れない。両

国広小路は米友にとつて鬼門きもんであるけれど、今はその危険を冒しても米友はそこへ行かねばならなくなりました。

「おじさん、どこへ行くの」

「うむ、俺おいらは広小路まで行って来る」

と言つて米友は、急に跛足びっこを引きずつてこの家を出かけました。

「こんにちは」

もう開場三日前、小屋の内外の装飾で忙しいところへ米友はやつて来ました。

木戸番は怪訝けげんな面かおをして米友の面を見ていると、米友は、
「軽業の娘たちはみんな甲州から帰つたのかね、一人残らず帰つて来たのかね」

「はい、みんな帰りましたよ」

「では君ちゃんも帰ったんだらう。君ちゃんが帰ったなら、ちよつとここまで面を出してもらいてえ」

「お前さんはどなたでございます」

「君ちゃんに会えばわかるんだ」

「……………」

「こんな人が尋ねて来たつて、君ちゃんにそう言つておくれ」

木戸番は米友の面をよく見ました。

「今こつちの方は忙しいんですから手が放されません、裏から廻つて楽屋の方へ行つてござんなさいまし、楽屋でお聞きなすつてみてござんなさいまし」

「そうですか、それじゃ楽屋の方へ廻つてみるかな」

米友は久しぶりでこの小屋の内部へ入つてみました。

大勢の人は気がつかないで立働いているが、米友はなんだか

気が咎^{とが}めるような心持で、勝手知つたる楽屋のところまで来て、恐る恐る言葉をかけました。

「こんにちは」

楽屋では一座の美人連が出揃つて、新興行にかかる小手調べをしているところでした。

「こんにちは」

米友は女軽業の美人連の稽古^{けいこ}場を覗^{のぞ}き込むと、

「どなた」

「おやおや、米友さんじゃないか」

「まあ、米友さんが来たよ、可愛らしい米友さんだよ」

美人連は稽古をしたりお化粧をしたりしている手を休めて、米友の方を見ました。米友は怖る怖る、

「皆さん、暫らく」

「米友さん、ほんとに暫らくだったね、どこにどうしていたの」
「あっちの方にいたんだ。皆さんはいつ帰ったんだい」

「わたしたちはこのあいだ帰ったのよ、まあお上り」

「上つちや悪かろう、親方はいねえのかい」

米友は楽屋の中を見廻しましたけれど、不幸にして、お君の姿は見えませんでした。土間を見たけれども、ムクの姿をさえ見ることができませんでした。

「親方は、ちよつとそこまで用たしに行つたから、もう直ぐに帰るだろう」

「あの……あの、君ちゃんはいねえのか」

「君ちゃん……」

と言つて、美人連は面を見合せました。

「君ちゃんも旅から一緒に帰つたんだろう、どこにいるんだい」

米友は、美人連が見合せた面をキョロキョロと見ていました。

「君ちゃんはねえ……君ちゃんは帰らないんだよ」

「おや、君ちゃんは帰らないんだって？ みんながこうして面を揃えているのに、君ちゃんだけが帰らないのかい」

「ええ、君ちゃんだけが帰らないんだよ」

「そりやどうしたわけなんだい、君ちゃん一人を置いてけぼりにして来たのかい、そんなわけじゃあるめえ」

米友がお君の安否を^{きづか}気遣う様子があんまり熱心であつたから、美人連はおかしがつて、つい冗談^{じょうだん}を言つてやる気になりました。

「米友さん、君ちゃんは旅先で、いい旦那が出来たから、それで帰るのがいやになつたのだよ」

「いい旦那が出来たって？」

「わたしたちなんぞはいずれもこんな御面相^{ごめんそう}だから、誰もかまっ

てくれる人はないけれど、君ちゃんは容貌よしだから、忽ち旦那が附いちまつたんだよ」

「そんなはずはあるめえ、そりや嘘だ」

米友は、いよいよ一心になりました。一心になればなるほどその態度が滑稽になりますから、人の悪い美人連は、そんなに悪い気分ではないけれど、ついついから、かい、があくどくなつてゆきます。

「第一、ここに君ちゃんのいないのが何よりの証拠じゃないか。

ほんとにあの人は仕合せ者だよ、甲府の御城内でお歴々のお方を擒とりこにして、今は玉の輿こしという身分でたいした出世なのに、わたしたちなんぞは、いつまでもこんな稼業かぎようをしていなけりやならない、ほんとに君ちゃんを思うと羨うらやましくてたまらない」

口から出まかせにこんなことを言いましたのを米友は、そん

なことはないと思ひながらツイツイ釣り込まれて、

「ナニ、君ちゃんが俺らおいに相談なしで、そんなことをするもんか、俺らがちゃんと附いてるんだ」

ウカウカと米友がこう言ったのが、美人連の笑いを買いました。

「ホホホホ、そうでしたねえ、君ちゃんには米友さんが附いてるんでしたねえ、こんな色男を捨てて君ちゃんも罪なことをしたもののさ」

彼等は辛辣しんらつな軽侮けいぶを米友の上に加えました。

女軽業の美人連は興に乗つて米友に毒口を利きました。こんな毒口は楽屋うちで言い古されている毒口でしたけれども、単純な米友は嚇かつと怒りました。

「ばかにするな、そんな了簡りようけんで言つたんじやあねえぞ」

「米友さん、怒つちやあいけないねえ、君ちゃんに捨てられたと思つて、そんなに自棄やけを起しちやいけないよ」

「馬鹿」

米友は眼をクルクルと剥むいて美人連を見廻しました。

「君ちゃんは俺おいらと約束がしてあるんだ、約束を破るのは女郎と同じことなんだ、君ちゃんは俺らと約束を破つて、一人で残つているような女じゃねえんだ、それを残して来たのはお前めえたちが悪いんだ」

「手が着けられないね。米友さん、お前が君ちゃんと、どんな約束をしたか知らないが、現に君ちゃんはここにいないで、江戸へ帰るより甲府がいいと言つて残つているから、文句がないじゃないか」

「お前たちが残して来たんだ」

「ばかにおしでないよ、こうして座を組んで、一つ鍋の御飯を
いただいて歩いていけば姉妹きょうだい同様じゃないか、離れようといっ
たつて離れられるわけじゃない、それに君ちゃんきみちゃんは花形だから、
親方の方でもはなすことじゃありません、それを振り切つて行
くくらいなんだから仕合せ者だよ」

美人連はこんなことを言つて米友を口惜くやしがらせました。

「本当のことを言つてくれよう、本当のことを」

米友は焦じれて歎願するように言いました。

「本当のことはね……本当のことは、やつぱり君ちゃんだけは
旅から帰つていないんだよ」

「ほんとうに帰らないんだね」

「それはほんとうだよ」

「よし、それじゃ俺らがその甲府というところへ行く、そうし

て君ちゃんに会って話をしてみりやわかることなんだ。甲府は何というところで、何という人の家にいるんだ、それを教えてくれ」

米友はこう言つてせきこんだけれど、女軽業の美人連はそれほどに行詰つてはいないから、

「まあ、ゆつくりと旅の話をしてあげるから上つて休んでおいでよ、お茶を入れるから」

これらの美人連も一蓮寺では、お君とムクのおかげで危ないところを救われているのだから、それを思えば、お君のためにも米友のためにも、もつと親切に身を入れて応対をしてやらなければならぬのですけれど、米友をあんまり軽く見ているから、ツイ身が入らないのでした。

「ちえッ」

米友は、もどかしさに舌を鳴らして、気がいよいよ焦立ちいらだました。

「だから旅へ出るのをよせと言ったんだ、それをきかないで出たから悪いんだ。ムクだつてそうだ、なんとか役に立ちそうなものじゃねえか、ちえッ」

米友が舌を鳴らして立っているところへ、お角かくが帰つて来ました。

「親方のお帰り」

と言つて、美人連の迎えを受けて楽屋へ入つて来たお角が米友を見ると、眼に角かどを立てて、

「おや、見慣れない人が来ているよ。誰かいないの、なぜあんな人をここへ通したんだろう、ここへ通して都合のいい人だからか、あんな人が小屋の廻

りにウロウロしていて人氣に触らないと思うのがお目出度いね、ほんとに氣の利かないやつらだ」

お角の機嫌が大へんに悪い。美人連のうちの一人が米友の傍に寄つて来て、

「お前さん、早くお帰り、親方に怒られると大変だから」

十四

軽侮^{けいぶ}と冷淡の限りを浴びせられて米友は、悲憤^{こら}を詠^{こら}えながらこの小屋を出て来ました。ことに親方のお角はどういう虫の居所^{いどころ}か、頭ごなしに米友を罵^{ののし}つて、水を浴びせかけないばかりにして、米友を追い出させてしまいました。

いつもの米友ならば我慢しきれないところでしたけれども、

感心に深く争わずしてこの小屋を出たのは、日の暮れる時分でありました。

さすがの米友もこの時は、実に口惜しかつたと見えて、両国橋の真中に来た時分に、立ち止まって橋の欄干から下を覗きながら口惜し涙をハラハラと落します。

いくら自分が粗忽で黒ん坊を失敗つたからと言つて、せつかく聞きに行つたのだから、一通りの消息ぐらゐは知らせてくれないでもよかりそうなるものを、ああして寄つてたかつて冷かした上に、ガミガミと突き出してしまふことは、いくら稼業柄とは言いながら薄情なやつらだと、それで口惜しくてたまりませんでした。

「腹が立つてたまらねえ」

米友は齒齧みをして、両国広小路見世物小屋の方を睨めまし

た。

「覚えてやがれ」

米友の面かおに殺気が浮びました。広小路の見世物小屋の方を睨んで、

「覚えてやがれ」

橋の真中から相生町あいおいちようの方へ歩き出すと、

「もし、兄にいさん」

と肩を叩いたものがあります。

「誰だ」

米友が振り返って見ると七兵衛でありました。もとより米友は七兵衛を知らないが、七兵衛は米友に見覚えがあります。

「兄さん、お前さんはこれからどこへおいでなさるのだ」

「どこへ行つたつていいじゃねえか」

「さつきからここで見てみると、お前さんは何か心配がおありなさるようだ」

「大きにお世話だ」

米友は七兵衛の面かおを睨みました。

「私は通りかかりの者だが、どうやらお前さんの姿に見覚えがあるから、失礼なことだが暫らく立つて見ていました、そうするとお前さんがしきりに何か言つて腹を立つておいでなさるようだから、もしも変な気を起してごんぶりとおやりなさるのかと思つて、こうして両手を出して見ていましたよ」

「大きにお世話じゃねえか、川へ飛ぼうと首を縊くろうとお前たちの世話にやらねえ」

米友は悲憤の思いでいっぱいですから、何を言つても耳へは入りません。

「兄さん、もしお金にでも困るようなことがあつたら、ずいぶん力になって上げようじゃないか」

「大きにお世話だと言うに。いつお前に俺おいらが金を借りたいと言つたい」

「そうガミガミ出られちゃあ、せつかく親切に話をして上げても何にもならない」

「俺らはお前に親切をしてくれろと言つた覚えはねえ」

「でも、こうして身投げでもしようというには、よくよくのことがあるんでしよう、御主人のお金を遣つかい込んだとか、身の振り方に困つたとか、何かよくよくのことがあるから、そんな無分別な考えを起すんだらう、それを通りかかつて見れば、みすみす見捨てて行くのは人情としてできないことだから、それで大きにお世話だが、言葉をかけてみる気になりました」

「いつ、俺らが身投げをすると言つたい、お前めえ、俺らがここにいたつて、身投げをするつもりでここにいるんだか、また別に何か考えているんだか、人の心持がよくわかるね、お前の方で身投げをするように見たつて、俺らの方では身投げなんぞする気じゃあねえんだ」

「兄さん、そんなことを言つて強がりを言つてみたところで、様子でわかりますよ、様子で。ほかから見るとお前さんの様子というものがよつぽど変で、口惜しまぎれに身投げをするか、人殺しをするか、その思案に暮れているようなあんばいに見えますから、それで私は見すごしができないわけなんでございます」

「嘘を言うない」

「嘘なもんですか。第一お前さんは伊勢の国からはるばる出ておいでなすつて、今晚泊るところもないから、それで死ぬ氣に

おなんなすつたのだろう」

「何だ、お前は俺らが伊勢の国から出て来たことを知ってるのかい」

「知っていますとも、伊勢の国で宇治山田の米友さんというのはお前さんだろう」

「おやおや、俺らのところから名前まで知ってやがる、俺らの方ではお前を知らねえ」

「それで兄さん、お前は盗賊の罪を被きて、あの尾上山おべやまというのから突き落されて死んだはずだが、それが生き返って、いま両国橋の上に立っているんだから、私は驚きましたよ、幽霊かと思いましたよ」

「おや、お前はそんなことまで知ってるのか」

米友は不安と怪訝けげんと交々こもごも、七兵衛の面を見返しました。

「心配しなくつてもようございます、お前さんの罪のないことは、私がよく知っているのでございますからね」

「うむ、俺らには全く罪がねえんだ、盗人ぬすつとはほかにあるんだ」

「そうでしょうとも、お前さんは盗人なんぞをなさるような方ではない」

七兵衛の信用を得て、米友はやや安やすんじた形でありました。

「俺らもあれから、ずいぶん運が悪くなり通しでね、なかなか苦勞をしたよ」

「そりやお気の毒でしたねえ」

「あつちへ行つてもこつちへ行つてもばかにされるんで、やりきれねえ」

今までの突慳つっけんどん貪に引換えて訴えるような声で言い出したから、

七兵衛もおかしくもあり、かわいそうにもなりました。

「私もお前さんの噂を聞いて、ほんとお気の毒でたまらないから、どこかで逢ったら、いろいろお話をして上げようと思つていたところでした、今日はまあ、いいところで会いました」

七兵衛と米友とは、どつちが先ということなしに両国橋を、本所の方へ向いて渡りながら身の上話。

十五

七兵衛に焚たきつけられたお角は、案の如く口惜しがってしまいました。百蔵はこのごろ、さる後家さんのところへ出入りするようになって、その後家さんが近いうち甲州へ出かけるに就いて、百蔵もその跡を追つて甲州へ行くから気をつけなければならぬと、七兵衛はお角を嗾けかけました。その上、右の後

家さんというのは根岸に住んでいて、先日お前さんの前へワザと古証文を突きつけたりなんぞした女だということをかきさけると、勝気のお角は矢も楯もたまらないほどに逆上せ、

「あんな女にこの上ばかにされてたまるものか」

お角は小屋へ帰つて、その腹癒はらいせに、せつかく来合せていた米友をさんざんに罵ののつて、その足でまた山下の銀床へ飛んで行きました。そうして百蔵の胸倉を取つて思う存分に文句を言いました。さすがのがんりきもこれには閉口して、しきりに申しわけをしてみたけれどお角は耳にも入れないから、結局がんにき、がお角の前に謝罪あやまつて、やつとその場を済ませたけれど、それからお角はがんにき、の家に浸入いりびたりで、その傍に附きつきりということになつてしまいました。何か言えば刃物三昧はものさんまいでもしかねない勢いであつたからがんにきも全く閉口して、当分、外出も

できないことになつてしまいました。

七兵衛はその有様を見て、手を拍つて自分の策略が当たつたことを喜び、その間に手形が下りて、お絹とお松とはが、ん、り、き、を出し抜いて甲州街道への旅路に出かけました。七兵衛は自分が見え隠れにこの女連おんなづれを守護して行くつもりであつたけれど、幸いに甚だ都合のよい従者を一人発見しました。その従者というのはすなわち宇治山田の米友であります。お君が甲州へひとり残されたことの真相を、七兵衛を通してお角から聞いてもらつたところが、女軽業の美人連から冷かされた時のように、よい旦那が出来たから甲府へ残つたわけではなく、全く火事のためゆくえふめいに行衛不明になつたのだとわかつて米友は、お君のことが心配になつてはるばる甲州まで行つてみる気になりました。

跛足びっこでこそあるけれども米友は、杖つえをついて飛んで歩けば、

あたりまえの人には負けない速力で歩くことができます。それで乗物で行く足弱の伴ともにはけっこう役がつとまる。それは槍を取つても取らなくても、生れついでの俊敏で気が早いこと無類で、気が早くて直ぐに喧嘩を買つたり売つたりする。これは人氣の悪い郡内あたりを通らすには善し悪しであるけれども、そこはよく七兵衛が意見をしておきました。

「兄さん、道中は無暗むやみに人と物争いをしちやあいけねえぜ、甲州街道の郡内というところは人氣が悪いところだから、女連と見たら雲助どもが因縁をつけるだろうけれど、酒手さかてをドシドシくれてやりさえすりや、たあいなく納まるんだから、お前の一本調子で相手になつちやあいけねえよ」

「うむ、いいとも」

「そうかと言つて、まるつきりおとな温和しくしていると悪い奴にばか

にされるから、時々威勢を見せつけてやらなくちやあいけねえ。ことにこの街道には、が、ん、り、き、と言つて一本腕で名代なだいの胡麻ごまの蠅はえがいるから、なんでも一本腕の男が傍へ寄つて来たら、ウンおどかト嚇してやるがいい」

「うむ、一本腕の胡麻の蠅が来たら用心するんだな。何と言つたけな、その胡麻の蠅の名前は」

「が、ん、り、き、という渾名あだながついてるんだ、ちよつと色の白い小作りな綺麗な男だ、そいつが駕籠の傍へ寄つて来たら用心をしなくちやいけねえ、夜の宿屋なんぞもほかに怖いものはねえが、その一本腕だけは油断をしちやあならねえからしつかり頼むよ」

「うむ、いいとも」

「おれは道中師だから、街道筋にどんな悪い奴がいるかということはチャンと心得ているんだが、おそらくそのが、ん、り、き、とい

う奴ぐらい悪い奴はねえ、またあのぐらいスバシッコイ奴もねえ、わけて女連と見た日には執念深く附いて廻つて仕事をする奴なんだから、そのつもりでしつかり頼むよ」

七兵衛は米友に向つて、なおくわしくが、んりき、の、人相や悪事の手並てなみを語つて、それに多くの敵意と注意を吹き込んでおきました。

お絹とお松とには正式の手形、米友はその従者として正當に関所を越えることのできるように手続が出来ました。箱惣はこそうの家にいる時分に、ひまにまかせて米友は自分で工夫して、自分が名をつけた杖槍つえやり。槍の穂えだけを取りはずして込こみのところを摺すり上げ、それをいつでも柄えの中へ箝はめ込むことができるようにして、穂を懐中に入れておき、柄は杖にしてついて歩き、いざという場合には、それを仕込んで咄嗟とつさの間に槍にしてしまふとい

う武器が出来たから、米友はそれを持って、頭には笠をかぶり首根ツ子へ風呂敷包を背負つて、お絹とお松との駕籠のすぐあとへついて出かけました。米友のその風采ふうさいはお絹もお松をも笑わせました。

それより三日目に両国の女軽業の見世物が開あけて、銀床に附ききりであつたお角も、どうしても小屋へ帰らなければならなくなりました。その隙すきを見てが、んり、きが根岸のお絹の住居すまいへ駆けつけて見ると戸が閉つていました。

「失策しまつた」

急いで取つて返して旅の仕度をしているところへ、折悪おりあしくお角が帰つて来ました。

「お前さん、何をしているの」

「ナニ、その、ちつとばかり」

「足ごしらえをしてどこかへおいでなさるの」

「ナニ、近所まで」

「近所のどこへおいでなさるの」

「ナニ、そんなに遠いところではない」

「そんなに遠いところでなければ、足ごしらえなどをしなくてもいいじゃないか」

「でも、久しく旅をしないから」

「おや、久しく旅をしないから、どこかへ旅をしてみたくなつたというんですか。知ってますよ、その旅先はちやあんと呑込んでいますからね」

「ナニ、少しばかり足慣らしをやってみるんだ」

「出かけるなら出かけてごらんさい、わたしという者をさし

おいて行けるものだから行けないものだから、さあ、出るなら出て
ごらんなさい」

お角はそこにあつた荷物と、が、ん、り、き、が結びかけた脚絆きやはんを取つ
て抛ほうります。

「何をするんだ、やい、ふざけたことをするな」

が、ん、り、きはその脚絆を取つて、また片手で足へ巻きつけよう
とすると、

「いけませんよ、わたしの見る前でそんなものを足へ巻きつけ
ると罰が当たりますよ」

「やい、何、何をするんだ」

「何をするんだもなにもありやしない、わたしがこの間から見
張っているのは何のためだと思つてるの、こんなことがあるだ
ろうと思うから、それで忙がしい小屋の方をさしおいて、こつ

ちへ来ているんじゃないか。それにちよつとの隙があれば、もうこの始末だから呆あきれ返つちまうじゃないか。あれ、まだそんなものを足へ巻きつけて、片かた一方手で捻ひねくり廻まわしている無器用なザマと言つたら。ほんとに突き倒してやるよ」

「な、なにをすするんだ」

「突き倒すよ、片かた一方手つぽてじや起きられないだろう、独り立ちで起きられもしないくせに、よくわたしを踏みつけにしたね」

「お前は何か勘違いをしているようだ、おれは今日、組合の方の寄合で千住まで出かけなくちやならねえのだ、それで遊山ゆざんかたがた、久しぶりで草鞋わらじを穿はいてみようと言うんだ、なにもお前に疑ぐられるような筋はありやしねえ」

「冗談をお言いでないよ、火事場へ行くんじゃないやあるまいし、千住まで行くに草鞋を穿いて行くやつがあるものかね、組合の寄

合に足ごしらえをして行くなんて、そんなばかばかしいことがあるものかね、千住がよつぽど遠くつてお気の毒さま」

「どうも手が着けられねえ、お前がなんと言おうとも友達が待っているんだ、約束がしてあるんだからやめるわけにはいかねえ」

「おや、友達がよかったねえ。そりやそうでしょうとも、いいお友達がおありなさるんだから、一刻も早く行ってお上げなさる方がいいでしょう。向う様もさぞ待っておいでなさるでしょうけれども、わたしというものがあつてみれば、そうも参りませんでお気の毒さま、ほんとにお気の毒さま」

と言つてお角は、口惜しがりながら、ぐんりきを横の方から突き倒す。

「この阿魔あま、あんまり凶に乗ると承知しねえぞ」

突き倒されたが、ぐんりきは起き上つて眼の色を変えると、

「さあ、わたしに恥を搔か^かせたあの後家さんの尻を追って行きたいんだろう、どこへでもおいで、グルになってわたしを出し抜こうとしたって、わたしの眼の黒いうちは……」

お角はまた口惜しがって武者振りつきました。

後註

- 一 「貧窮」は底本では「貧弱」

大菩薩峠 市中騒動の巻

底本：「大菩薩峠 3」ちくま文庫、筑摩書房
1996（平成 8）年 1 月 24 日第 1 刷発行
1996（平成 8）年 3 月 1 日第 3 刷

底本の親本：「大菩薩峠」筑摩書房
1976（昭和 51）年 6 月初版発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号 5-86）を、大振りにつくっています。

※疑問箇所の確認にあたっては「日本国民文学全集・別巻 1 大菩薩峠 第 1 巻」河出書房、1956（昭和 31）年 3 月 15 日初版発行と、「中里介山全集 第 2 巻」筑摩書房、1970（昭和 45）年 9 月 19 日発行を参照しました。

入力：(株) モモ

校正：原田頌子

2001 年 10 月 4 日公開

2004 年 3 月 6 日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。